

すみよし



2022年 クリスマス号 第211号

目次

☆ 聖句	A・K	…	2
☆ 巻頭言	コンスルタ神父	…	3
☆ ようこそ！ジェロ神父様		…	6
☆ ありがとうございました！エマニュエル神父様		…	7
☆ 諏訪司教様引退のお知らせを受けて	T・U	…	9
☆ 四旬節黙想会	崔 周永神父	…	11
☆ ベトナムのクリスマス	D・W・H	…	15
☆ 赤波江神父の黙想のヒント		…	19
☆ 住吉教会2022年		…	31
成人式を迎えて	A・K T・K		
☆ 追悼 ペンケレシ神父様	エマニュエル神父	…	41
☆ 追悼 生藤神父様	S・Y	…	43
☆ 帰天司祭および納骨者のための祈念ミサ	N・K	…	45
☆ 各チーム活動報告		…	47
☆ トピックス		…	52
☆ 図書紹介		…	53
☆ (信徒動静)		…	
☆ 教会日誌		…	54
☆ 後記		…	55

題字:S・Y 表紙写真:ベトナムのクリスマスの岩窟(D°さん提供)



「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。
左記二次元コードからのアクセスもご利用下さい。

聖句

神は独り子をお与えになるほど
この世を愛された。

ヨハネによる福音書
3 章 16 節

選:テレジア A・K





《私にとってクリスマスとは?》

コンスタンシオ・コンスルタ神父

クリスマスの星の光が暗い荒野の寒い夜を照らし、丘や谷、せせらぎや川、森や草原を越え、最も遠くから来られる方の所に導くように、牛や羊たちが身を寄せる馬小屋の小さなすき間に差し込みます。私たちは毎年のように平和を私たちの心にもたらされるキリストがお生まれになった奇跡をお祝いします。キリストは私たちを支え導く光であり星です。

少し思い起こしてみましょう。もしクリスマスがなかったら？無くて差し支えはないのでしょうか？もちろん、何か足りないとすぐさま抗議するでしょう。しかしクリスマスはいったい何を意味するのでしょうか。クリスマスはイベントですか？私たちはクリスマスのイベントを話題にしますが、それはうわべをみているだけです。むしろクリスマスは与えてくれるものです。なぜクリスマスイブは控えめで質素なのでしょう。なぜ五つ星ホテルや病院、個室ではなく馬小屋なのでしょう。「降誕」がなぜ派手なショーとして演出されなかったのでしょうか。たくさんの天使たちにソリとトナカイ、その中心に赤ちゃんのイエスとともにいるマリアとヨゼフが多くのコーラスや派手で豪華な照明とともに天上から降りてきて、「若者」のためのポップやロックバンドと一緒に「きよしこの夜」に加わる。いいえ、このような「ハリウッド的な」クリスマスイブではなく、謙虚、控えめ、静かな雰囲気のものなのです。

まさにクリスマスのメッセージの核心はここにあるのです。クリスマスのメッセージはまさしく画期的です。それは私たちが通常思い描くことの対照にあります。

想像してみてください。キリストが来られて最初になさったことは記者会見を開くことでもインスタグラム、YouTube、TikTokなどのメッセージでもありません。また各国のリーダー達、裕福で美しい「スター」達、VIP、王や王妃達を招いたわけではありません。ただひとつ私たちに伝えられたのはこの世にクリスマスの星を輝かせ、王宮や王たちにではなく天使たちを直接に羊飼いたちにお遣わしになったことです。その当時の社会の底辺で生活し、将来の希望もなく、貧しく見捨てられた人々です。

クリスマスを革新的な何かと比較するのは奇妙に聞こえるかもしれませんが。それは利己的な組織や考えを否定するものです。宿屋の主人が出産時の苦しみによる「騒音」やそれによる他の宿泊者への「迷惑」をはばかって部屋を貸さなかったこと。ローマの圧政によりマリアはヨゼフとともに困難な時でありながら、単に人口調査のためだけに旅に出なくてはならなかったこと。

クリスマスは利己主義、不満、自分の利益のみを考えることに対して立ち向かいます。果てしない「勝-負」的考え方は真の「勝-勝」に取って代わられなくてはならないのです。

「無条件に自身を差し出す」、お互いの為になることをする、お互いを認め合うと同時に共感し思いやる、これはクリスマスの奇跡の贈り物です。

クリスマスの奇跡は人間であることの最も崇高な善、即ち生きることの意味を持つということです。クリスマスは信頼、受容、喜び、真心、快活、そして善の高揚を溢れ出させます。

クリスマスは愛、寛容、尊敬、連帯の祝祭、そして家族や友人との祝祭、お互いを許し合い、後ろを振り返るのではなく前を向くことの祝祭です。

クリスマスは年に一度しかありませんが、クリスマスの星は私たちの心の中を一年中輝かせてくれるのです。ですから毎年クリスマスとクリスマスイブには次のクリスマスに向けての新しい力を得ることができるのです。

クリスマスおめでとうございます。そして多くの寛容、愛、真心の美しく楽しい時を過ごせる次の365日となりますように。互いを思いやり健やかに過ごせますように。



What Would Be The Meaning Of Christmas For Me?

Fr. Constancio Consulta

The light of Christmas stars pierces the dark, bare and cold night. It fights its way to the farthest corners, over hills and dales, over streams and rivers, over forests and meadows - to the smallest crevices in the stable where oxen, cows and sheep find refuge. We commemorate, as we do every year, the miracle of Christ being born, who brings peace in our hearts. He is both light and a fixed star, bringing support and orientation to our bright and dark days.

If only to provoke our thoughts a little: What would happen if Christmas did not exist? Could we even do without it? Of course, we immediately protest that we would be missing something. But what? What is the meaning of Christmas? Is Christmas a spectacle? We could talk about a Christmas spectacle but that would only be a superficial observation. Instead, Christmas still inspires. Why is Christmas Eve so unpretentious and plain? Why only in a stable, not even in a 5-star hotel or hospital, single room, private? Why was the "coming" not staged as a great show? Imagine how thousands of angels with sleighs and reindeers and in the middle Mary and Joseph with the baby Jesus would descend from high above, accompanied by singing choirs, by the thousands, everywhere with pompous light effects, and pop and rock bands for the "young ones", who would all join in 'Silent Night'. No, "Hollywood-like" Christmas Eve does not come along. The mood remains modest, discreet, unobtrusive, calm.

Precisely here lies the core of the Christmas message. The message of Christmas is downright groundbreaking. It is the counterpoint of what we would normally expect. Just imagine: Christ comes and the first thing he does is not to invite people to a press conference, no Instagram messages, Youtube and Tiktok videos. He also doesn't invite world leaders, the rich and beautiful, "stars" and starlets, VIPs, Kings and Queens to join Him. The only thing that has been told us is that he sent out angels into the world, let a Christmas star shine, and instead of the palaces and kings, the angels appeared directly to the shepherds. Those people, who lived also at that time in the hierarchy at the lower end of the scale, with few perspectives, little income, little attention.

It may sound bizarre to compare Christmas to something revolutionary. It attacks egoistic structures and views. Here the talk of the hostel owners who do not rent a room for fear that the birth pains could cause a lot of "noise" and "bother" the other residents. There is talk of the "dictatorial" behavior of the Romans, who demand that Mary set out with Joseph even in the most vulnerable hour - and this only to collect population figures. Christmas fights against the egoism, against the discontent and against the "only of his own advantages" to be considered. The perpetual "win-lose" mentality should give way to a real "win-win". "Giving of oneself", doing something good for each other and empathizing and thinking "in the other person", as well as acknowledging each other, is a gift of the Christmas miracle.

The Christmas miracle embraces the highest good of being human, namely, that it has a meaning to live. Christmas exudes confidence, approval, joy, cordiality, cheerfulness and upheaval for the good. Christmas is the feast of love, tolerance, respect, solidarity; the feast of coming together in family and with friends; the feast of forgiving each other and looking forward and not backward.

It is true that Christmas is only once a year. However, the meaning of Christmas is to let the **star** of Christmas shine in our hearts throughout the year. Thus, every Christmas Eve and Christmas, we simply get a new booster to last beyond the next Christmas. Merry Christmas and many beautiful joyful moments of giving, love and cordiality in the next 365 days! Take care of each other and stay healthy.



《ようこそ！ ジェロ神父様》

5月8日、復活節第四主日、新しく神戸東ブロックの協力司祭として赴任されたジェロム・パダモ・サルトノ神父が初めて住吉教会でのミサを司式されました。

インドネシアのご出身ですが、ご自身は「地球人」とお答えになるそうです。

ミサ後に子供達を集めて一人一人に優しく語りかけられるご様子はとても楽しそうでした。

「神父様と呼ばないで、ジェロと呼んでください！」とおっしゃってられますが、慣れない私たち、つい「神父様」とお呼びしてもお許しくださいませ。



～ジェロム神父の自己紹介文より～

カトリック住吉教会の兄弟姉妹の皆様、私はジェロム・パダモ・サルトノです。

1962年6月3日に生まれました。インドネシア、フローレス島の出身です。

ジェロム、またはジェロと呼んでいただければ大変嬉しいです。ギリシャ語の先生によると、ジェロムという名前は神様のお寺を意味するそうです。

私は、カトリック淳心会のメンバーの一人です。1996年8月11日に司祭叙階式を受けました。1993年、蜂蜜の日に日本に参りました。FMラジオによると、蜂蜜は八月三日を表します。これから、主イエス・キリストのしもべとして喜びと希望を持ち、楽観的に皆様と共に前に前に進み歩みたいと思います。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。



《ありがとうございました。エマニュエル神父様》

2017 年春に神戸東ブロックの担当司祭として赴任され、5 年間にわたりお世話になったエマニュエル・ポポン神父は、2022 年の復活祭の後、夙川教会へ転任なさいました。コロナ禍の困難な時期も明るくお導きくださり感謝申し上げます。



2020 年 2 月 29 日、新型コロナウイルスにより、公開ミサが中止という発表がカトリック大阪大司教区より発表されました。未知のウイルスに対する恐れ、またこの先どうなるかという不安の中、エマニュエル神父から届いた神のことばを味わうためのヒントです。

2020 年 3 月 8 日 四旬節第 2 主日 神のことばを味わうためのヒント

アブラハムについて。

私たちが神様を探し求めているのではない。神様こそ私たちに寄り添い、私たちに話かけている。そしてアブラハムと同じように私たちにこう約束してくださる。

「今までの自分、知識、財産、人間関係を捨て、これからわたしがあなたにしめす道に従って行きなさい。わたしを聞き、信用すれば、必ずあなたを豊かにします」と。

神様が約束してくださるからこそ、私たちは神様を探し求め始めることができます。

信じることは知ることではない。命をかけて、その約束に沿って生きるということだと感じます。

その約束の内容はイエス様の変容の話からもう少し明らかにわかります。

神様は豊かな輝かしい命を約束します。イエス様を通してその約束が明らかになりました。

神様は私たちが命へ導いてくださる方です。

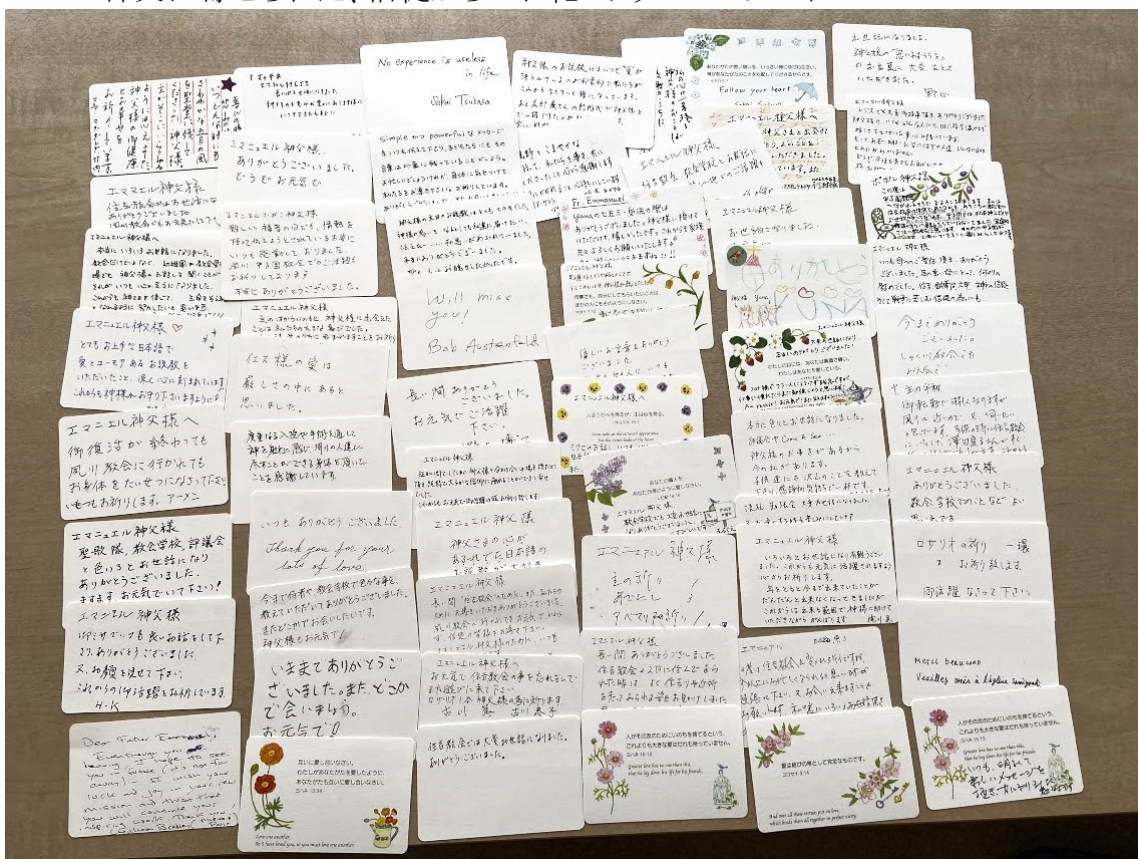
何も恐れず、神様に従うものになれるように祈りたいと思います。

エマニュエル・ポポン



2018 年 クリスマス

エマヌエル神父に寄せられた、信徒からのお礼のメッセージカード



エマヌエル神父様、ありがとうございました。お元気で！

《諏訪司教様 1995年 住吉》

～高松教区 諏訪榮治郎司教様引退のお知らせをうけて～

T・U

1995年1月17日、阪神淡路大震災発生。

震災直後、カトリック大阪大司教区北摂地区7小教区から支援ボランティアが派遣され、住吉教会生藤神父の指導の下、被災者支援の物資提供が開始された。当時、隣接する住吉小学校に大規模救援基地や医療施設が設置された。

住吉教会評議会での震災直後の6時間半に亘る話し合いを経て、六甲教会の先輩と共に安否確認調査が行われた。その後、同年4月に諏訪神父が高槻教会からご着任後、酷暑酷暑のプレハブ司祭館に居住され、住吉公園に設置された「住吉仮設住宅支援ボランティア連絡会」に住吉地区各自治会・コープ



こうべ第4地区・東灘助け合いネットワークと共に参画し、諏訪神父は中心的役割を果たされ、特に住吉教会近隣の住之江地区自治会役員の皆さまと連携し、住吉仮設での自治会運営支援、ふれあい喫茶、カトリック医師会による医療相談等が展開された。

星の園幼稚園・住吉教会の復興は後回しとし、まずは地域の復興から各支援活動が進められて行った。その中においても、星の園幼稚園運動会開催について、魚崎グラウンドを使用させていただいたり、教会学校の子どもたちが住之江温泉を利用させていただいたりして、地域からの支援や復興バザーでさらに交流を深めて行った。私も震災7日後から全国から派遣された代替バスに乗ることが出来、震災後の3か月間、山手幹線・国道2号線を通って西宮の職場まで2時間以上かけて通勤し、土日は教会活動を行うことが出来た。

震災後、諏訪神父(2年間)矢野神父(5年間)が主任司祭として私たちを導かれ、震災7年後の2002年、大阪大司教区の池長大司教・神林事務局長・住吉教会担当司祭諏訪神父(神戸中央教会と共同宣教司牧が開始)・星の園幼稚園熊谷園長(後の教区教育課長)と「住吉教会・星の園幼稚園建設委員会」が発足し、大司教・司祭・幼稚園長・教会信徒・幼稚園先生が参加し、審議を重ね、2003年からパウロ神父が着任され、幼稚園の解体・新築、住吉教会の解体・新築を経て、震災から11年

目次

後の 2006 年に住吉教会の献堂式を迎えました。

27 年前の記憶を辿り、当時 42 歳で活動していた私もあと4か月で古希を迎えます。

今般、諏訪高松司教様ご引退が教皇から承認され、名誉司教様になられたとのカトリック新聞記事や教区お知らせを拝見し、当時の記憶を再び思い起こしておりました。

諏訪司教様のご指導に感謝申し上げますとともに、教区新生20年の歩みを振り返り、これからもお元気で私たち信徒を導いて下さいますよう、お祈りいたします。



2011 年 6 月 19 日司教叙階式
(2011 年「すみよし」被昇天号より)



住吉在任中に(1995・4～1997・4)教会学校の子
供達が描いた諏訪神父様のプロフィール

《四旬節黙想会》

3月6日、崔 周永神父様のご指導のもと四旬節の黙想会がありました。

ミサの福音は、イエス様が荒れ野で試みにあった箇所（ルカによる福音 4 章 1-13）、ミサに引き続いての黙想会は、「荒れ野」がテーマでした。

崔神父様は、イタリア留学中の2年半前頃から、思う事を文章にしてショートメールで定期的にご友人に送っておられました。それがまとまった量になり、本にして出版したらという声に押され、韓国での出版を考えていらっしゃいます。修道会で2年の修練期間を終え、修道士になって間もなく大病を患い、修道院を出ることになった一番辛かった頃の文章、叫びのような祈りのような文章の一部を翻訳してお話くださり、黙想会が始まりました。



講話 崔 周永神父

「すみよし」編集部 要約

「小さい毛布の上に横になって」より抜粋

修道会を出て実家で4年半ほど居候していた。3年間の療養の後、1年半ほど労働していた時期のことであった。大工として働いていた江原道から、休みの日にはいつもバスに乗って慶尚道にある実家に帰った。東海岸を走るバスの窓から見える景色に、私の知らない所と道がまだ韓国にはたくさんあり、そこには数多くの物語を持っている人が住んでいる、と感じていた。

帰ると小さな窓が一つある二階の小さな部屋で、ラジオを聞いたり新聞や本を読んだりしながら過ごし、眠くなった時は居眠りをしていた。床の上に毛布を横に半分に畳んで敷き、その上に横になったら私の身体にぴったりだった。コンクリートの床の固い感触が、毛布越しに少しやわらいで私の背を通して伝わってきた。

それまでのいつもせわしく鞭うつように生きてきた人生が病で崩れ、修道院からも出され、危機といえば危機であった。小さい窓の外の広い世の中では、いるべき場所で自分の仕事をしている人々がいると感じ、同時に私はその世界から疎外された感じだった。小さな窓の外の大きな世界は騒々しいけれど、それぞれの秩序の中で回っていて、私はまるでこわれた部品のかげらのように小さい部屋で横になっていた。小さい毛布の反対側にはせわしなく動く地球があり、そこにいる彼らの日常や人生と私の人生はなんの関連もないと感じていた。その時の気持ちは、「焦り」というよりは「開きなおり」といった言葉に近いのかもしれない。このように生きて行くのもそんなに悪くないという考え方が力となってくれた。

病に倒れ、世の中のルールから外れた私は、休みの日には小さい毛布の上に横になって休み、また江原道行きのバスに乗って仕事に赴き働いた。なぜあの時の記憶が、とりわけ小さい毛布の上に横になっていたあの記憶が、とてもいい思い出として浮かんでくるのだろうか。あの時は一人ではあったが、寂しさは感じなかった。それは、おそらく私の中の生命力が、他の感情を感じるにはまだ容量不足だったこと、現場で重い木を取り扱うという大工の仕事に従事しながら、また私も自分との戦いに取り組んでいたからであろう。身体を動かし、そして休むという自然なリズムが、死の寸前にまでいった身体と心と魂を呼びさましていったのであろう。今思うと、小さい毛布の上で眠っていたあの時は、神様が私に新たな身体と心と魂を入れてくださった時だったのではないだろうか。まるで、エバを作るために、深い眠りにおとされたアダムのように。

それはまた、私を取り戻させるための時間でもあった。

「荒れ野」というタイトルでこの文章を選んだ理由は、何かの理由で苦しんでいるすべての人々、「小さい毛布の上に」横たわっている彼らに、励ましと愛のこもった祈りを捧げるためです。この四旬節に十字架に向かって歩まれるイエス様と同じ苦しみの中にある隣人たちのために祈りを捧げます。

文章を書くという作業はつらい作業です。では、なぜ人は文章を書くのか、それはわかちあうためです。一人で抱えこんでもやもやする何か、定義することのできない自分の状態を、文字にしていける。文字が意味になり、人々に読んでもらう事によって何かが起こります。なぜわかちあうのか、一人一人は物語そのもので、そしてそれを人々に分かちあうことで自分を素直にさせてくれます。日本の社会や文化は自分を素直にさせてくれない気がします。24時間いつもニコニコできますでしょうか。素直になりましょう、というのが私の叫びです。

毎日・そして主日ごとに読まれる聖書の箇所は変わります。しかし、ポイントはいろいろあっても、結局は同じで、命にかかわるものです。神様は大事な生命を与えてくださり、愛してくださるにもかかわらず、私たちは常に神様から離れようとします。

わたしたちは、真剣にあるべき、素直になるべきです。信仰は深いとか、浅いとかではなく、素直になるということなのです。



韓国の二十年来の友人の詩を紹介します。彼はカトリック信者の詩人です。お互いにとてもつらいことを抱えて荒れ野を歩いている時にいろいろ話をして、慰め合っていた友人です。

「結局」

今日降りてきた雨は海に行っただろう。
海に流れて大きい海になったのだろう。

今日足についた土が道だったのだろう。
一歩ずつ足の触れたその所が道になっていったのだろう。

今日私が見て聞いて話していたすべてのことは
考えと行動となって、結局私の胸になっていくだろう。

昨夜も就寝時間が遅くなってしまったけれど、それでも就寝前にはきれいに部屋を掃除しました。なぜなら、それをしなければ、今日皆さんの前でもっときれいな状態で黙想会ができないと思ったからです。私の語る言葉を裏打ちするものは、日頃の行いなのです。整えた生活があってこそ語る言葉が力を持つのです。

とても大きく素晴らしいことが私たちを成長させるのではなく、小さなことが私たちを成長させていくのです。悪いものは外から入ってくるのではなく、自分のうちから出てくるものなのです。この詩にあるように、触れて行動して聞いたすべての事が自分になっていく。聞いて話して行動したことが自分というものを形作っていくのです。

「ていねい」という言葉がふさわしいのかもしれませんが、なげやりにするのではなく、本気で、素直に、ていねいに取り組んでいくことが大切です。信仰生活とは本気で取り組むもの、「ていねい」にやるべきものでしょう。また、どんなに取り繕っても、ふるまいや言葉でその人の人となりはでてくるのです。隠すことはできない。ばれてしまいます。

私の中には「神様の時」というテーマがいつもあります。

私たちが、キリスト信者として信仰の手ごたえを感じていないのは、祈りの量に見合った恵みを要求するからではないでしょうか。神様は恵みの自動販売機ではありません。これだけ祈ったのですからお与えくださいと、まるでボタンをおせば恵みが出てくるかのような自動販売機ではありません。

また自動販売機のとえでいうと、わたしたちがボタンをおした時と、神様が「よし」とされる時間には「ずれ」があります。その時は何秒後でしょうか、何年後でし

ょうか、もしかしたら生きているうちには来ないのかもしれない。自動販売機のように押し続けて自分がほしい時に恵みに与っているわけではなく、信仰とは神様が主人公なのです。

それが信仰宣言（クレド）なのです。人生のイニシアティブは神様が持っているということが、わかっていくことが信仰が深まっていくことなのかもしれません。自分が洗礼を受けて信仰生活に入ったのではなく、神様が呼んでくださったのです。素晴らしい恵みをいただいているのです。自分の物語の中で神様からいただいた恵みがいったい何なのか探して見つけてほしいです。

神様は遠くにいるのではなく「私たちの間近にいる」「みんなの中にいる」。それを信じ感じるのが信仰であり祈りです。誰かに答えを欲しがるとはではなく、とことん神様に向かい合うべきです。私が皆様に、もっと神様を親しく感じてもらえる方法としては、「一生懸命に」「ていねいに」「本気で」語ることに。自分の偉そうな言葉ではなく神様の言葉を 100% 伝えるためには自分自身をきれいにしていくこと、掃除をすること、祈ること、そして今与えられた仕事を一生懸命にすることです。

今日のごミサと黙想会でわかちあったことすべてのことが皆様の中で何かの形でご自分の物になっていくでしょう。私自身もわかちあうことによって、神様をもっと身近に強く感じることとなりました。神様と一緒に生きていくこと、これより素晴らしい生き方を他に知りません。これ以上の幸せを感じるすべを知りません。

四旬節に入りました。神様への信仰、人々への接し方、態度、どうすればもっといきいきと幸せにキリスト信者としてこの日本の社会の中で生きて行くことができるのかと、もう一度考えていただきたいと思います。

～最後の祈り～

神様はすばらしい宝物を蔵にもっておられます。そこには扉がついていなくて、素晴らしい宝物はすべての人々に対して開かれているのです。いつ来て、何を持っていっても大丈夫なのに、人々は神様の蔵に入って行かない気がします。なぜでしょうか。何を恐れているのでしょうか。

また、世界ではロシアによるウクライナ侵攻という悲劇が起こっています。ロシア人が悪いのではなく、その戦争を仕掛けるというその心、その欲望を私たちも持っていることを認めないといけません。もっと平和な世界・地球は口先だけによる何かによるのではなく、私たちの回心によるものです。私たちの心をキリスト信者にふさわしいものにしてくださいと切に祈ります。

そして分かち合いのある所、今日ここに集っているわたしたちの心を大事にしてくださいと信じております。

神様に私たちのすべての信頼をおいていきますように。

《ベトナムのクリスマス 過ごし方や付属教会紹介》

D・W・H

自己紹介

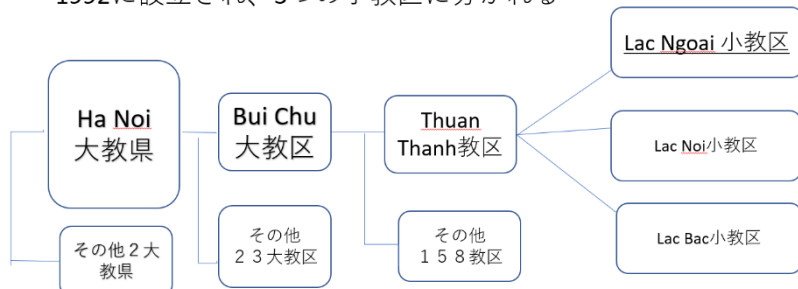
・出身:ベトナム ・来日年:2017 年
*2 年間東京で日本語学校に通って、2019 年
神戸国際大学入学のため神戸に引っ越し。
*お店を出す夢を持って、現在神戸国際大学で
経済経営学科・会社経営コースで学んでいる。
*現在カレーハウス **CoCo** 壺番屋でアルバイト
をし、元町店舗と住吉店舗に行っている。

生まれた地方・キリスト教との関係

・ベトナムの北部のナムディン県
(NAM DINH)生まれ。
・ナムディンは北部のキリスト教の中心であ
り、600 前後の教区がある。(大阪大司教
区74教区)
・ナムディン県での司祭・司教・信者数
司教 :2人
司祭 :191人
神学生:134人
信者数:47 万人
(ナムディン人口の 25%を占める)

ベトナム教会機構と所属教区

- ・ THUAN THANH 教区の Lac Ngoai 小教区に所属している。
- ・ 1992 に設立され、3 つの小教区に分かれる



東南アジアで最も大きなジュセ様の像と
言われ、この像を見に来る観光客も少な
くない。高さ40m くらい。
中身は空洞で肩まで階段に繋がり、肩
にドアがあり、そこまで登られる。



Thuan Thanh 教会の外側

ジュセ様像・母マリア像・12人の使徒など設置される。
教会の後ろ側に教会学校がある

なぜ住吉カトリック教会に来る若いベトナム人は多い？

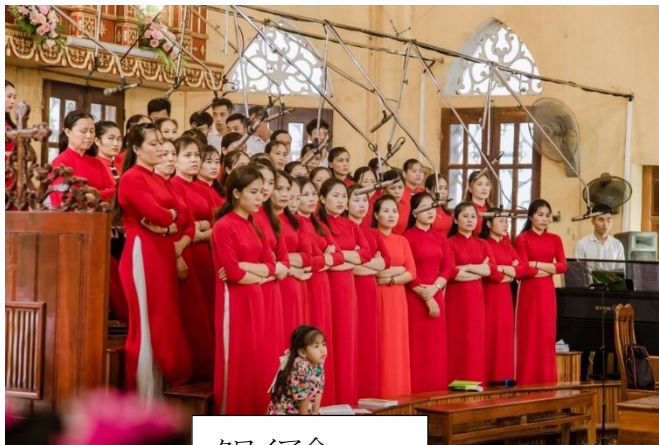
- 教会に日本人の若者(10代・20代)の姿は少ないのに対して、若い外国人(ベトナム人・フィリピン人など...)が少なくないと思われる日本人が多いと思います。
- なぜなら
 - * 僕たちは(小学校 1 年生から 5 年生まで)毎日学校が終わってから教会学校に親に行かせられ、教理を学びました。
 - * 教理を3つのレベルに分かれて、初級・中級・上級がある。中学校 3 年生までに全部学ばなければなりません。各級が合格したら、卒業式で賞品や賞状ももらう(参加必須)。
 - * それのほか、キリスト教についての試験毎年2回もあり、1 位・2位・3位により、現金などもあったからです。(参加必修ではない)。



洗礼式のミサ



ロザリオの月(5月・10月)に聖母マリアに花を奉納する風景



クワイア会

クリスマスの過ごし方や行事

24 日にイエス様が岩窟で生まれた出来事を記念するための「岩窟作り会」を開催。2 日前から各小教区が準備始める。司祭と組織委員会が採点する
採点部分: 丈夫さ・審美性・印象的・聖書との正しさ
優勝したチームが賞品・現金など賞をもらう。



- 24 日に文芸会を開催。
- イエス様が生まれた出来事を記念するのに演劇・ダンス・talk show・舞扇など行う。
- 1位・2位・3位・4位・5位が賞品や現金・お菓子がもらえる。
- 下記は文芸会の様子。





- 24日の23:30にミサがあり、24:00に5分ほど鐘を撞く。同時にクワイア会がイエス様の誕生の歌を合唱。
- 25日各家族で休暇をとり、パーティーをする。
- 近年、ベトナムではクリスマスデーの人気の高まっている。休日ではないが、クリスマスは誰にとっても喜びの時だ。また、クリスマスツリーを飾ったり、子供たちにプレゼントを贈ったりと、クリスマスの日美しい空間を作る人もいる。ベトナムの子供たちは、サンタクロースに夢や希望を伝える手紙を書く文化も形成している。キリスト教徒ではないベトナム人にとって、クリスマスは幸せな日のようなもの。そのため、両親は子供たちに・恋人は相手に・友達は友達に贈り物をする人も多い。

ここまでご覧頂きありがとうございます。

ベトナムへ行ってみたいという方がいらっしゃいましたらガイドをします！

ダンさんに原稿をお願いしたところ、たくさんの美しい写真を載せたパワーポイントでベトナムの教会の様子を紹介してくださいました。紙面の関係上、今回はクリスマスに関する写真を中心に掲載させていただきました。待降節のミサ後にこのパワーポイントでダンさんにプレゼンテーションをしていただく予定です。(12月11日)。また、ホームページにも全体を掲載しておりますので、ご覧ください。(編集部)

《赤波江神父の黙想のヒント》

週末に連絡網メールで届く「赤波江神父の黙想のヒント」は、私達を励まし、心を神様へ向かわせ、大きな喜びを与えてくれます。

2021 年 12 月から 2022 年 11 月まで、毎月 1 話を選び、1 年を振り返ります。



～2021 年 12 月 5 日

待降節第 2 主日 赤波江神父の黙想のヒント～

「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 1 : 9～10）

ロヨラのイグナチオは、重要なことは嵐の中で決断しないように、嵐が過ぎ去った後に決断するようにと教えました。つまり、何か重要なことを決断するときは決して心が怒り、不安、混乱、パニック状態にあるときにはしてはいけないということです。必ず後で後悔します。このことは多くの人やグループが経験してきました。大切な決断は心の嵐が過ぎ去った後の、静寂さの中で決断しなければならないのです。また、このことはイグナチオだけではなく、歴史に登場した賢人たちも共通して語っています。一見していいと思われることが必ずしも聖霊の働きではないのです。

教会でも何か大切なことを決めるとき、怒り、混乱、熱狂、パニックなどの嵐の中では決して決断しないでください。そのような状態で決定されたことは幻想であることが多く、一見いい考えに思えても必ず落とし穴があり、やがて教会に混乱と分裂をもたらします。議論が混乱してきたら思い切って中断し、嵐が過ぎ去るのを根気よく待ち、それから決定してください。

何が聖霊の働きであるかは識別が難しいときがありますが、ひとつのしるしがあります。それは、今日の朗読箇所ではありませんが、パウロが聖霊の実り、つまり聖霊の働きのしるしとして挙げている「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」（ガラテアの教会への手紙 5 : 22～23）です。このように、個人でも、共同体でも、心が愛を始めとする聖霊の九つの実りに満たされた静寂さの状態にあるときにこそ、今日パウロが言うように、「本当に重要なこと」を見分け、決断するようにしてください。



～ 1 月 16 日 年間第 2 主日赤波江神父の黙想のヒント～

「イエスは最初のしるしをガリラヤのカナでおこなわれた」
(ヨハネ 2 : 11)



イエスの最初の奇跡は、病気の人を癒したのではなく、悪霊を追い出したのでもなく、婚宴と言う家庭生活の始まりである場で、水をぶどう酒に変えた奇跡でした。イエスは突然天から降ってきた人物ではなく、私たちと同じ平凡な家庭で育ちました。イエスが最初の奇跡を家庭生活の始まりである婚宴の場で行われたことは、イエスは何よりも私たちの家庭を祝福してくださったことを意味しているのですね。同じように司祭もまず家庭で育ち、信仰教育を受けます。その意味で「家庭は最初の神学校」と言われています。

しかし家庭は愛と信仰が育たなければならない大切な場ですが、多くの試練に直面しなければならない場でもあります。その一つが平凡で単調な毎日の連続だということです。たいいてい毎日が同じことの繰り返しです。そのような生活の中で倦怠感に襲われ、会話も非常に少なくなることがあります。イエスが婚宴の席で水をぶどう酒に変えたのは大きな意味があります。水は単純平凡さのシンボルです。ぶどう酒は祝福のシンボルです。即ちイエスが水をぶどう酒に変えたのは、一見単純平凡に見える家庭生活を、信仰の目を通して祝福に満ちたものに変えて行かなければならないことを意味しているのですね。今与えられたもの一つ一つに意味と価値と感謝を見出すこと。不平不満は自分を破滅に導く恐ろしい罠であることを知ること。私たちが人間的にも霊的にも成熟を目指す上で第一に心がけるべきことは、今自分に与えられたものに価値を見出し、それを最大限に生かすことです。

こんな譬えはいかがでしょうか。今の自分の家が狭くて汚い、もっと大きないい家に住みたいと思ったら、まず今の家を楽園に変え大きな家に住む準備をしましょう。部屋をきれいに掃除して床をピカピカに磨き上げ、カーテンも変えてみたり、食事は乏しい食材でも工夫をこらして自分なりのご馳走にしましょう。そうすれば、やがて自分の家もまんざら悪くはないことに気づくでしょう。そんな時間も金もないというのであれば、部屋に「忍耐」というハンマーで、「優しさ」という鋸を打ち込んだ、「ほほえみ」というカーペットを敷き詰めましょう。そうやって、自分が自分の運命の設計者であることが分かれば、世に言う「悪いこと」は、実は姿を変えた「良いこと」に他ならないことが分かるでしょう。

単純な毎日を信仰の目で変容させる「単純さの聖化」。その単純さの内真意あり。あなたが今立っている単純な生活の足元には、すでに幸せの花が咲いています。





～2月20日 年間第7主日 赤波江神父の黙想のヒント～
「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」(ルカ6:31)

この言葉は一般に「黄金律」と呼ばれ、数千年にわたって人間の行動規範とされてきましたが、実はイエス以前から同じようなことは言われてきました。「彼は、自分自身にとって望ましいと思う善を他の人々のために求めた」(紀元前600年頃のエジプトの碑文)「我々は世間が自分に対してやってほしいと望むように、世間に対して振る舞わなければならない」(アリストテレス)など。しかし「黄金律」と呼ばれる今日の福音の言葉は分かりやすい反面、少しニュアンスが変えられて解釈されることも多いのです。

こんな寓話があります。昔南の島で原始的な生活をしていた部族にある宣教師が「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」と説教したところ、それを聞いたその部族の村長はいたく感銘を受けたらしく、後日彼はプレゼントを携えて司祭館を訪れました。そのプレゼントは村長が最も望んでいたものだったのですが、何と彼は6人の妻をその宣教師に贈ろうとしたのでした！これはあくまでも寓話ですが、同じような例は時々見られます。

例えば、ある人が友人の結婚記念日に非常にきれいな花瓶をプレゼントしたとします。その友人は非常に嬉しそうに感謝してくれました。さてその人は、その年の教会のバザーでその花瓶が出品されているのを見かけました。その時のこの人の気持ちを想像してみましょう。その人はこう考えたかも知れません。「人がせっかくプレゼントした花瓶をバザーに出すとは何事か！あの嬉しそうな顔は嘘だったのか！もうこんな人にプレゼントなんかするものか！」

実は、この人は自分の好きなものを相手に贈って、相手を束縛しているのですね。この人は無意識の内にこう思っていたかも知れません。「あなたはこの花瓶をいつまでも大切にしてい、応接間の中央に置いて磨き、いつも綺麗な花を活けて、わたしが来たらいつも感謝しなければならない」などと。しかし友人は元々花瓶には興味がなかったのかも知れない。でも友人は贈ってくれた相手の心を喜んでくれたのですね。

「賢明な人は、その愛する人からの贈り物より、贈り物をくれる人の愛を重んじる」(トマス・ア・ケンピス、古典的名著『キリストに倣いて』の著者で修道者)ですから何かプレゼントするときには、「何も当てにしないで」(ルカ6:35)それを処分する自由、バザーに出す自由、他の人にあげる自由も同時に与えなければならないのですね。

今日の福音書は、別に自分の好きなものを相手にプレゼントしなさいと命じているのではなく、相手の望みを相手の立場に立って判断し、相手の目を通して世界を見てくださということなのですね。そのことで他の人が必要とすることに目が向き、人への思いやりも深まり、そのことがやがて自分の幸せへとつながっていくのです。



～3月20日 四旬節第3主日 赤波江神父の黙想のヒント～

「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」

(ルカ 13 : 5)

今日の福音の言葉は、当時起こった事件を譬えに、イエスが厳しい口調で回心を迫る話しです。でも「滅びる」という言葉は厳しい言葉ですが、誰が誰を滅ぼすのでしょうか。そのヒントになるのがパウロの言葉です。「不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました」(1コリント 10 : 10) 滅ぼす者とは自分自身のことです。不平は自分自身を滅ぼす恐ろしい罫です。心というものは、それ自身がひそかに抱いているものを引き寄せます。それは、それ自身が本当に愛しているもの、あるいは恐れているものを引き寄せます。心が呼ばなかったものはやってきません。人生で起こるあらゆる出来事は自らの心が引き寄せたものです。心に何を描くのか、どんな思いをもち、どんな姿勢で生きていくのか、それこそが人生を決める最も大切な要素なのです。

仏教には因果応報という法則があります。即ち、私たちに起こる全ての出来事には、必ずそうなった原因があります。それは日頃の自分の思いや行いであり、それが因となって果を生んでいくのです。私たちが今何かを思い、何かを行えば、それは全て原因となって、必ず何かの結果につながるという法則です。ですから、今の自分というものは、今まで自分が思い、行ってきたことの結果なのです。

でも、今日私たちは一緒に滅ぼしましょう。何を滅ぼすのでしょうか。それは過去の間違った私たちです。イエスは多くの罪人と出会いましたが、共通することは、一度も彼らの過去を問わなかったことです。あの受難の夜、ご自分を見捨てて逃げ去った弟子たちに対してでさえ、復活したイエスの第一声は、「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ 20 : 19) で、弟子たちの背信行為には何も触れなかった。これは私たちにとっても嬉しいことです。イエスは私たちの罪深い過去は一切問わない。出会ったときに恵みのときだから。それなら、わたしたちも自分で自分の首を絞めてきた不平という罫を滅ぼしましょう。

不平という罫を滅ぼさなければならない理由は、モーセが神に名を求めたとき、神は「わたしはある。わたしはあるという者だ」(出エジプト記 3 : 13) と答えました。神はこの世界をあらゆる存在そのものです。そのことは創世記が伝えています。「神はお造りになった全てのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」(1 : 31) それならば、この世のあらゆる存在のなかに悪ではなく、まず善を見出して、悪があったとしても、それを善に変え発展させること、それが神への協力者として創造された人間の使命だからです。





～4 月 17 日 復活の主日 赤波江神父の黙想のヒント～
「イエスは死者の中から復活することになっている」(ヨハネ 20 : 9)

復活の信仰は、教会の信仰の中で中核を成すものですが、イエスの他の倫理的な教えと違い、非常に難しいものです。何故ならば、私たちはまだイエスのように死を経験していませんから。死の彼方には何か大いなるものがあるに違いないと信じていますが、まだそれを見ていません。その私たちの今の状態は、ちょうど夜明け前の曙の状態に譬えることができます。曙とは夜の闇が終わり、周りが少しずつ明るくなる状態を言います。間もなく太陽が昇るのは紛れもない事実です。しかし私たちはまだ太陽を見ていない。

別の角度から考えると、例えばこの宇宙はバランスを保ちながら成長し続けています。宇宙は循環しながら誕生と死を繰り返しています。生命に寿命があるのはそのためです。但し、生命のエネルギーは死によって消えるのではなく、それは宇宙のエネルギーと同化して、再び新たな生命体に宿る準備であり、新たな生命への回帰です。このことを教会では死と復活と呼んでいます。死があるからこそ生命のエネルギーは不滅で永遠なのです。一人一人顔も違えば、性格、個性も違うように、与えられた寿命もそれぞれ違いがあります。問題はどれだけ満たされた人生であるかということです。イエスは 33 歳で墓に入りました。

この世界は二元的なものから成っています。闇と光、雄と雌、暑さと寒さ、主観と客観、内面と外面、肯定と否定、入口と出口、そして誕生と死など。そしてこの二元性が人間の本性の基礎になっているのです。アメリカの思想家エマソンは、この世界には「代償の法則」というものがあると言いました。この世界で、自然で、そして人生で何か失ったものがあれば、必ずその代償として、それと同等かそれ以上のものが神から与えられます。また反対に何かを得たのであれば、その代償として他のもの失わなければなりません。神と自然は独占や例外を望まないのです。何事においても発生のみ、消滅のみということはないのです。今までの人生で多くの犠牲を払ってきたと思ったのなら、実はそれ以上の恩恵も受けてきたのです。自分の長所と思っていたことが却って自分を苦しめることがあり、また反対に自分の欠点に救われなかった人もいません。私たちの真の強さは弱さから生い茂ってくるのです。例えば、親しい人の死に接して、それは喪失以外の何ものでもない、しばらくは絶望の淵に立たされても、やがて亡くなった人の思い出は自分の人生の導き手、道しるべ、守り神であることを知るようになります。それはまず、イエスの弟子たちが経験したことでした。

一つの幸せの扉が閉じられるとき、神は必ず新たな幸せの扉を開いてくれているのです。しかし多くの場合、私たちは閉じられた扉にばかり目が行き、新しい扉に気づかないことが多いのです。しっかりと目を凝らして見つめましょう。私たちが何かを犠牲にしたのなら、神は必ず、それと同等かそれ以上のものを与えてくださっているのです。大きな希望を持って新しい扉を開きましょう。私たちは復活したイエスと同じように、もう古い墓にはいないのです。



～5月8日 復活節第4主日 赤波江神父の黙想のヒント～
「わたしは彼らに永遠の命を与える」(ヨハネ10:28)

永遠の命とは何でしょうか。永遠の命は神秘で、私にもまだよく分かりません。でも、「私は永遠の命を信じます。何故なら、私には永遠なるものへの憧れがあるからです。」(ヘレン・ケラー) この「永遠なるものへの憧れ」は日々の小さな生活の積み重ねの中から生まれてきます。永遠とは時間の長さのことではなく、時の概念を超えたことを言います。この時を超えたもの、それは人間の心です。心は何十年も前のことを呼び覚まし、遠い将来を思い描きます。時は過ぎ去るとよく言います。確かに、時は風のように過ぎ去るように見えながらも、実は心に積もってゆくものなのです。人生は大きな砂時計のようです。砂時計は、時の経過を上部の砂が減ることで表しながら、同時にその砂は音を立てずに下に積もっていきます。この砂時計のように、時は過ぎ去りながらも、心に積もり続けるものなのです。時の流れの中で経験したこと、今日出会った人、今日見た景色、今日感じたこと全てが砂時計の砂のように、しんと積もる雪のように、わたしたちの心に積もり続けて人生を織りなしながら、「永遠なるものへの憧れ」を形成していくのです。この心に積もったことは、普段眠っていることが多いのですが、必要なときにはしっかりと目を覚ましてくれるのです。「雪」という三好達治の詩があります。

太郎を眠らせ 太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎を眠らせ 次郎の屋根に雪ふりつむ

わずか二行の詩ですが、しんと雪が降り積もる北国の冬の中にも、何か温もりを感じさせてくれる詩です。太郎と次郎を眠らせたのは誰でしょうか。母親でしょうか。雪は何を意味するのでしょうか。母親の愛情でしょうか。自由に解釈できますが、今の私には、太郎と次郎に表される人間を眠らせたのは神で、雪は時の重みを意味しているように思えるのです。人間が眠っているうちに、即ち知らず知らずの間に、あらゆることを経験させてくれた時の重みは、人間の心に積もり続けてゆく。だからこそ、私は今日のこの一日を自分の一生の全てと思って、この瞬間、瞬間に心を込めて人生をしっかりと紡ぎながら、「永遠なるものへの憧れ」を膨らませていきたいと願っているのです。



～6月19日 キリストの聖体 赤波江神父の黙想のヒント～
「すべての人が食べて満腹した」(ルカ9:17)

満腹という言葉は幸せを表す言葉の一つです。しかし、満腹は心が満たされてこそ言える言葉です。腹という言葉は胃袋だけではなく、心も含みます。



～5月8日 復活節第4主日 赤波江神父の黙想のヒント～
「わたしは彼らに永遠の命を与える」(ヨハネ10:28)

永遠の命とは何でしょうか。永遠の命は神秘で、私にもまだよく分かりません。でも、「私は永遠の命を信じます。何故なら、私には永遠なるものへの憧れがあるからです。」(ヘレン・ケラー) この「永遠なるものへの憧れ」は日々の小さな生活の積み重ねの中から生まれてきます。永遠とは時間の長さのことではなく、時の概念を超えたことを言います。この時を超えたもの、それは人間の心です。心は何十年も前のことを呼び覚まし、遠い将来を思い描きます。時は過ぎ去るとよく言います。確かに、時は風のように過ぎ去るように見えながらも、実は心に積もってゆくものなのです。人生は大きな砂時計のようです。砂時計は、時の経過を上部の砂が減ることで表しながら、同時にその砂は音を立てずに下に積もっていきます。この砂時計のように、時は過ぎ去りながらも、心に積もり続けるものなのです。時の流れの中で経験したこと、今日出会った人、今日見た景色、今日感じたこと全てが砂時計の砂のように、しんと積もる雪のように、わたしたちの心に積もり続けて人生を織りなしながら、「永遠なるものへの憧れ」を形成していくのです。この心に積もったことは、普段眠っていることが多いのですが、必要なときにはしっかりと目を覚ましてくれるのです。「雪」という三好達治の詩があります。

太郎を眠らせ 太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎を眠らせ 次郎の屋根に雪ふりつむ

わずか二行の詩ですが、しんと雪が降り積もる北国の冬の中にも、何か温もりを感じさせてくれる詩です。太郎と次郎を眠らせたのは誰でしょうか。母親でしょうか。雪は何を意味するのでしょうか。母親の愛情でしょうか。自由に解釈できますが、今の私には、太郎と次郎に表される人間を眠らせたのは神で、雪は時の重みを意味しているように思えるのです。人間が眠っているうちに、即ち知らず知らずの間に、あらゆることを経験させてくれた時の重みは、人間の心に積もり続けてゆく。だからこそ、私は今日のこの一日を自分の一生の全てと思って、この瞬間、瞬間に心を込めて人生をしっかりと紡ぎながら、「永遠なるものへの憧れ」を膨らませていきたいと願っているのです。



～6月19日 キリストの聖体 赤波江神父の黙想のヒント～
「すべての人が食べて満腹した」(ルカ9:17)

満腹という言葉は幸せを表す言葉の一つです。しかし、満腹は心が満たされてこそ言える言葉です。腹という言葉は胃袋だけではなく、心も含みます。

私たちが洗礼によってイエスの弟子となり、名前が教会の洗礼台帳に書き記されましたが、同時に、イエスは私たちの名前を天国台帳にも書き記してくださいました。嬉しいことです。そのとき、イエスは私たちのためにポイントカードを作ってくれたと思うのです。私たちの身近にポイント制というのがあります。何か買い物をしたり、施設を利用したりするとポイントカードにポイントをつけてくれて、それがある程度貯まると、それで買い物ができたり、施設を無料で利用できる制度です。しかし、ポイントは忘れてしまっていることが多く、時々店員さんから、「お客様ポイントが貯まっていますよ」と声をかけられて気が付くことが多いのです。

確かに私たちは知らず知らずのうちに罪を重ねます。でも同時に知らず知らずのうちに善いこともしているのです。困った人にそっと差し伸べた手、悲しむ人と共に流した一滴の涙、落ち込んだ人にかけて小さな励ましの言葉など。でも、このようなことは多くの場合、当然のことをしただけで、善いことをしたという意識はないし、次の日には忘れてしまっていることが多いのです。だいたい、善には自意識というものがないのです。反対に、自分で善いことをしたと思ったら、どこか自己満足があるのではないのでしょうか。でも神は私たちが忘れてしまった小さな愛の数々にこそしっかり目を留め、忘れずに天国にポイントをつけてくださっているのです。確かに、私たちは今まで多くの罪を重ね、赦しの秘跡でも忘れてしまった罪の赦しを願います。しかし、もし神が私たちの罪にばかり目を留めているのなら、それは私たちの神ではありません。愛である神（ヨハネの第一の手紙 4：7～8）はご自分の似姿として私たち人間を創造されました（創世記 1：27）。それならば、その神ご自身が私たちの善いところに目を留めてくださらないはずがないでしょう。

イエスは十字架上で亡くなる前、ご自分を苦しめた人たちの赦しを父なる神に願って、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 23：24）と祈りました。でも、同時に私たちのためにも、「父よ、彼らを見捨てないでください。彼らは、自分たちがしている小さな愛の業の偉大さを知らないのです」と父なる神に永遠に祈り続けていると思います。そして、いつか私たちがこの世の務めを終えた時、天国の店員である天使から「君、ずいぶん愛のポイントが貯まっているよ」と言われ、皆さんの顔が思わずほほえみに満ちあふれることを願っています。



～8月7日 年間第19主日 赤波江神父の黙想のヒント～

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」
(へブライ人への手紙 11：1)

8月6日から15日まで平和旬間です。現在ウクライナ問題で世界は緊迫していますが、ウクライナだけではなく、1989年ベルリンの壁崩壊によって独立した旧ソ連邦の国々も再び大きな危機に直面しています。例えば、バルト海沿岸のエストニア、ラトビア、リトアニアの三国は「バルト三国」と呼ばれていますが、この三国がたどっ

た歴史は、国境を接する大国ロシアからの侵略の繰り返しでした。近代から現代に至っても、

バルト三国はソ連に突如占領され、民族の独立どころか、思想言論の自由は否定され、知識人や独立論者はことごとく粛清されたのでした。そうした中で、1989年8月23日バルト三国の人々は、自由、民主主義、民族自決を求め、「自分たちの民族の未来は、自分たちの手の中にしかない」と叫んで、バルト三国がそれぞれ600キロの国境を越えて、タリン、リガ、ビリニュスと200万の人々がお互い手を取り合って史上最大の「人間の鎖」を築いた出来事は、「バルトの道」と呼ばれ、現在ユネスコの世界記憶遺産に登録され、現代史の重要な一部となっています。

そのバルト三国の一つ、リトアニアには世界無形文化遺産「十字架の丘」があります。その起源はポーランド人とリトアニア人が占領国ロシアに対して蜂起した（1831年の11月蜂起、及び1863年の1月蜂起）ことに始まります。しかしこの蜂起はロシアによって制圧され、処刑された反乱者やシベリアへ流刑された人たちを悼んだ人たちが、一つ一つ十字架を持ち寄って祈ったことに始まります。その後リトアニアはドイツ帝国の崩壊により1918年独立し、「十字架の丘」は平和や独立戦争で亡くなった人のため祈りをささげる場所となりましたが、1940年ソ連の侵攻を受け再び苦難がはじまりました。

杉原千畝がリトアニアの領事として命のビザによって2139人のユダヤ人を救ったのもこの頃です。1940年7月18日の早朝、閉鎖間際だったリトアニアの日本領事館前に、ヒトラーの迫害を逃れた多くのユダヤ難民が殺到して、日本経由で第三国へ出国する通過ビザを求めてきました。杉原領事が日本政府に問い合わせたところ、「条件を満たさない者にビザを発給してはならない」という返事でした。日本政府に従うべきか、ユダヤ人の命を救うべきか苦悩の末、彼は一か月間にわたって日本の通過ビザを発給し、2139人のユダヤ人を救ったのでした。しかもそのビザは全て彼の手書きだったのでした。しかし彼は帰国後、外交官として政府に無断でビザを発給した責任を問われて外交官を免職となりました。彼の行動が再評価されたのは、1968年8月、イスラエル大使館から彼のもとに電話があり、やがてニシュリと言う名のユダヤ人が彼のもとを訪れて、ボロボロになったパスポートを見せ、「あなたのおかげで私たちは救われた」と告げたことに始まります。実は、杉原千畝に助けられた多くのユダヤ人が、感謝を伝えるため彼の所在を探していたのですが、なかなか見つかることができなかつたのでした。実に命のパスポート発給から28年後のことでした。

さてリトアニアは1944年、リトアニア・ソビエト社会主義共和国としてソ連邦の支配下に入りました。1990年にソ連邦の崩壊とともに独立を果たすまで、リトアニア人たちは、この丘に行き十字架をささげ祈ることで、非暴力による抵抗を示していたのでした。その間、ソ連政府は3度にわたってブルドーザーでこの十字架の丘を破壊しようとしたましたが、リトアニア人の信仰まで破壊することはできなかつたのでした。1993年教皇ヨハネ・パウロ二世はこの十字架の丘を訪れ、ここが希望と平和、愛、そして犠牲者のために祈る場所であることを世界に告げました。現在、この十字架の丘はリトアニア最大の巡礼地であり、今も多くの人が平和を願ってここで祈りをささげ

ています。満たされた心一つで神のもとへ帰りましょう。

今日私たちは、このウクライナの隣国リトアニアの苦難の歴史を思いながら、今日のヘブライ書を次のように読んで、ウクライナの人々のために祈りましょう。

「信仰とは、望んでいる事柄（ウクライナの平和）を確信し、見えない事実（ウクライナの完全独立と国の再興）を確認することです。」



～9月18日 年間第25主日 赤波江神父の黙想のヒント～

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」（ルカ 16：10）

今日のみ言葉「小さな事への忠実さ」、それを習慣と言い換えることができます。人生とは習慣です。古代ギリシアの哲学者アリストテレスは「習慣とは繰り返された運動である」と言いました。即ち、習慣が性格や人格を形成するのですね。「何事も努力ではなく習慣にせよ」とよく言われます。習慣は日々の積み重ねですから、それを習い性にすれば、その後はつらいとも面倒とも感じなくなります。ですから、大事なことはよい習慣を早くから身につけることです。よい習慣に早くから身につけた人は人生の実りも大きく、反対によい習慣を軽視して生きている人は、人生そのものを軽視して生きているようにも思えます。

鳥は生まれついた飛び方を変えることはできません。動物も生まれついた這い方や、走り方を変えることはできません。しかし、人間だけが生き方を変えることができます。人間だけが自分の命の限界を意識しながら、その限りある命をどう生きようかと生き方を変えることができます。それは人間だけに与えられた特権であり、その特権は小さな習慣の積み重ねによって成し遂げられるのです。「リンゴに芯があるように、人間は生まれながらに『死の種』を宿している」と詩人リルケは言いました。しかし、同時に「人間は死に向かって成長し続ける存在である」とも精神分析学者エリクソンは言いました。

天才とか才能とかという言葉がありますが、それは決して一瞬のひらめきではなく、毎日の積み重ねが自然にできることを言うのですね。普段からどれだけ小さな事に忠実に打ち込んできたかということが大事であり、スポーツ選手などもよく「勝負の神は試合の時だけではなく、普段の生活を全て見ておられる」と言います。即ち、「勝負の神は細部に宿る」と。毎日の小さなことへの忠実さが勝負を分ける。これは何もスポーツに限ったことではなく、私たちの人生の勝負にかかわることであり、同様のことは教会の偉大な聖人たちも口をそろえて言ってきました。

「ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」とイエスは警告しました。人は自分が与えたものを受け取ることになります。永遠の生命の入り口には『人は自分が蒔いたものを刈り取ることになる』という言葉が鮮やかな文字で刻まれています。



～10月23日 年間第30主日 赤波江神父の黙想のヒント～

「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

(ルカ 18 : 14)

今日の黙想のヒントは柔道の話です。私が好きだった柔道家で、昨年53歳で癌で亡くなられた古賀稔彦さんがいました。常に一本を取りに行く姿勢、小柄ながらも切れ味鋭い技、豪快な一本背負い投げを得意とし、「平成の三四郎」と言われました。しかし、金メダルを期待されて初出場したソウル五輪では3回戦敗退でした。それまでマスコミで散々取り上げられ、「頑張れ、頑張れ」と声援を受けていたのですが、帰国後は「古賀は世界で通用しない」、「古賀の柔道はもう終わった」などと中傷され、彼の周りからは潮が引くように誰もいなくなったのです。彼もひどく落ち込み、人間不信になってしまいました。

そんなある日のこと、何気なしにテレビのオリンピック総集編で、たまたま自分の試合を見ていた時、彼の目が画面にくぎ付けになりました。そこには彼の両親の姿も映し出されていたのですが、彼が負けた直後、日本から応援に駆けつけてくれた人たちに向かって、何と両親が期待に応えられなかった彼に代わり、深々と頭を下げているのです。その姿に彼は大きなショックを受け、自分を恥ずかしく思ったのでした。それまで、「自分が練習して、自分が強くなって、自分がオリンピックに行き、自分が負けて、自分が一番悔しい」と思い、応援されることも当たり前だと思っていたのですが、実は戦っていたのは自分一人ではなく、両親を始め、彼をサポート、応援してくれた多くの人と一緒に戦っていたことに初めて気づいたのでした。彼にとってまさに、目からウロコが落ちる思いでした。自分の背後ではこんなにも大勢の人が一緒に戦ってくれている。もう両親に頭を下げさせるわけにはいかない。応援してくれた人たちのためにも、次の五輪で必ず金メダルを取って恩返ししよう。その思いが原動力となって次のバルセロナ五輪で、怪我に苦しみながらも金メダルを取ったのでした。

「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」この言葉の意味は、人間高ぶっている時は、心の目が閉ざされて自分の世界しか見えず、周りの本当の姿が分からないのです。反対に、へりくだって自分を支えてくれる周囲の人に感謝したとき、ものごとの本当の姿が見えてきて、それが本当の生きる力の源になるのです。それを感謝力と言います。しかし、それは場合によったら古賀稔彦さんのように、一度挫折や失敗を経験して初めて、心の目が開かれることも多いのです。

私たちは一人で生きているわけではありません。私たちの背後では多くの人が私たちのために生き、私たちを応援しています。しかし、このことは言葉としては分かりますが、一度壁にぶち当たらないとしないと実感しにくいものなのです。しかし、挫折や失敗によって多くの人の支えや愛を知ったならば、それはもはや過去の挫折や失敗ではなく、今を生かす「貴重な経験」となるのです。



～11月6日 年間第32主日赤波江神父の黙想のヒント～
「すべての人は神によって生きている」(ルカ 20:38)

今日は、普段とは違った角度から話します。今から 138 億年前、物凄い高温高压の素粒子の塊が大爆発を起こして宇宙が作られました。これを「ビッグバン理論」と言います。地球の誕生は 46 億年前で、地球に生命が誕生したのは 40 億年前です。最初海に誕生した生命は、やがて陸へ進出しました。もともと地球に酸素はなかったのですが、植物が生まれ光合成によって酸素を作ることで、人を含めた動物が暮らせる環境が生まれました。やがて人は進化して、他の動物とは違った高度な理性と魂を持つようになり、人は死んでも魂の永遠、即ち「神が再び立ち上がらせてくださるとい希望」(マカバイ記 7:14) を願うようになりました。そのため、神を信じ、争いを避け平和に暮らすことを願うようになりましたが、パウロが言うように「全ての人に信仰があるわけではないのです。」(テサロニケ 3:5)

ロシアがウクライナに侵攻している状況は、第二次世界大戦と全く同じであり、人間は歴史から何も学んでいないことを示しています。私はこのような紛争が起こるたびに、実は人類社会は進化していないのではないかと思います。科学技術は進化しているように見えながら、心は進化しておらず、その進化していない心で技術を進歩させようと思うので、科学技術も間違った方向に陥ってしまいます。だからいつの時代でも、私たちは神を必要としているのです。「すべての人は神によって生きている」からこそ、正しいものは正しい、間違っているものは間違っていると判断し、神を知らずに道を外れて生きている人には、それを正して神に立ち返るよう促す使命があるのです。そして、第一朗読マカバイ記のように、苦しみの中でも神を信じて世を去る人に永遠の生命が約束されていることを伝え、そのような人の信仰が後に続く人々の魂を支え、進化させるのです。

死があるからこそ、生命のエネルギー、即ち魂は不滅なのです。一人一人、顔も違えば性格や個性も違うように、与えられた寿命にもそれぞれ違いがあります。重要なのは単に長く生きるかどうかではなく、どれだけ満たされた人生であったかどうかです。16 歳の少女を看取ったある医師は、その子が神や両親に感謝し、医師や看護師にも感謝の言葉を述べて、静かに命の灯を消した最後の様子を見て、自分に与えられた命を全うした素晴らしい死だと、深い感動を込めて語っていました。この少女の命は死によって表面的に消えたかに見えましたが、その生命のエネルギーである魂は新たな生命として生き続け、彼女に関わった人たちの魂を進化させたのです。

どのように生きるかということは、思想や文学で答えを見出せても、どのように生涯を終えるかということは、やはり宗教の助けが必要になります。宗教は、にわか勉強では難しいのです。ですから、死ぬ前ではなく、若いうちから「人生と名付けられた、この束の間の歲月」についてしっかり考え、自分の死生観を託することのできる宗教を見つけなければならぬのです。
(選：編集部)

《 住吉教会 2022 》



1月1日（土） 神の母聖マリア

今年の新年ミサは元旦午前 11 時から行われ、コロナ禍にありながら多数の出席がありました。例年通り、最後に赤波江神父からアーロンの祝福を受け、「アーメン」と答えました。

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔をあなたに向けてあなたを照らしあなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように。



1月6日（木） 小野浜の炊き出し

サンテレビニュースの特集に、「コロナ禍2年 ホームレスは増えた？減った？神戸で年末年始の炊き出しに行列」というタイトルで、小野浜の炊き出しが放映されました。



コロナで仕事がストップし、野宿しないまでも生活に困窮している人が多いようです。「誰も生まれたときから野宿していたわけじゃない。炊き出しを通して関わりを作っていくことが大事」との山野代表の言葉が印象的でした。



阪神淡路大震災後から始まった“炊き出し”、住吉教会は毎月第一土曜日を担当しています。皆さまお気軽にご一緒しませんか？



1 月 9 日（日） 主の洗礼(成人のお祝い)

9 時半からの主の洗礼のミサの中で、新成人のお祝いがおこなわれました。赤波江神父は「知らない世界に出かけてみれば、知らない自分が見えてくる。これからの人生で思うように行かないときは思わぬ所に道がある。失敗から学んで成長してください。」と説教されました。

その後、出席した 2 人の新成人が祝福されました。「新成人の未来に主の大きなお恵みと祝福がありますように」と、ご両親と共に一同がお祈りしました。

聖体拝領の後、赤波江神父から紹介された 2 人の新成人は信徒の前で挨拶し、今日の式のお礼を述べました。欠席したもうひとりの新成人からもメッセージが寄せられ、披露されました。



新成人おめでとうございます。

ヨセフ T・K さん

アッシジのフランシスコ A・K さん

ラファエラ F・N さん

このたびは、成人のお祝いをして下さり ありがとうございます。
大学入学時に神奈川から兵庫に越してきました。今は神戸大学の 2 回生
です。ようやく対面授業が始まり、キャンパスに通えるようになりました。
中々慣れませんが、これからもより一層勉学に励みたいと思います。

F・N（当日のメッセージ）

2022 年 1 月 9 日、住吉教会で、成人のお祝いをしていただき、ありがとうございました。現在は神戸に住んでおらず、住吉教会を訪れることが数少なくなりましたが、幼いころからお世話になったこの場所でたくさんの方々にお祝いしてもらい大変うれしく思います。

この住吉教会では、たくさんの思い出があります。星の園幼稚園に通っているときの教会での様々な行事、洗礼や初聖体での勉強、そして普段のミサなどを通していろいろな経験をさせてもらいました。本当に今までありがとうございました。

また、自分としても 20 歳を迎え、大人になったと思う反面、心身ともにまだまだ未熟で、学ばなければならないことがたくさんあると感じます。ですので、20 歳からもこれまでと同様に、たくさんを経験し、学んでいきたいと思います。

この度はお忙しい中このような場を設けていただきありがとうございました。これからも日々感謝しながらいろいろ経験していきたいと思います。

A・K

2022 年 1 月 9 日、昔から大変お世話になっている住吉教会にて、多くの温かい成人のお祝いやご祝福を頂き、とても嬉しく感じました。本当にありがとうございました。

思い返すと住吉教会の皆様から、初聖体や公教要理、イースターなどの行事でさまざまな多くの貴重な学びや経験を授からせて頂きました。教会の方々には皆親切でとても居心地が良く、このような経験をこの教会でさせて頂けて本当に良かったと思っており、とても感謝しています。こんな私ですが、これからもどうぞよろしくお願い致します。

また、今までの人生を振り返ると、教会の方々はもちろん、両親、友人、学校の先生、など多くの方に支えられ、さまざまな場面で助けられてきたように感じます。私にはまだまだ未熟な部分がたくさんありますが、これまでに皆様からもらった思いやりを生かし、今度は自分から積極的に困っている方々にそれを還元していけるような大人になれる様に精進致しますので、これからも温かく見守っていただけると幸いです。

この度は本当にありがとうございました。

T・K





2月20日(日) 大阪サンパウロによる四旬節前書籍販売

年間第7主日のミサ後、大阪サンパウロの出張書籍販売がありました。今年もブラザー阿部の元気そうなお顔を拝見しながら、お勧め書籍を紹介いただき、うれしい一日となりました。カトリック系の専門書籍やカード、メダイなどを近くで買うことができなくなったこともあり、貴重な出張販売に皆が喜んでいました。

四旬節を前に、読書で思いを巡らすよい機会をいただきました。



購入した3冊が2階図書コーナーに♡貸出ノートご記入の上ご利用ください

3月2日(水) 灰の水曜日



四旬節が始まり、午後7時からのミサに集いました。エマニュエル神父は、『四旬節は何かを犠牲にするのではなく、何かを始める時。神は命のみなもと、ひとりでも神は共にいるという一番大切なことを特に意識する時である。』と説かれ、英語でも繰り返されました。

灰のしるしを受けて四旬節を始める私たちが、神の呼びかけにこたえて、心を新たに、キリストの道を歩んでいくことができますように。



4月16日(土) 復活の聖なる徹夜祭

4月16日、復活徹夜祭のミサがエマニュエル神父の司式によりおこなわれました。復活のろうそくから聖堂に集う信徒のろうそくに、光が次々に灯され広がっていきました。

エマニュエル神父は説教の中で「洗礼を受けることは、命を愛することです。生きることはよいことと、深いところから信じ、感じ、喜び、歌うこと。命は人が作るものではなく、命の与え主である神がくださったもので、私たちは神の命のうちに生きている。洗礼はそのことを感謝して認めることです。死に至っても私たちの命は神のうちにある。命は復活です。イエスはその初穂です。命を受け入れ活かすことが愛するということです。」と話されました。



神父様にお花とカードをお渡ししました

4月17日復活の主日(日)

復活の主日のミサが赤波江神父の司式により行われました。

お説教で赤波江神父は、「一つの幸せの扉が閉じられるとき、神様は必ず私たちに次の扉を開いて下さいますが、私たちはその扉に気付かないことがあります。次の扉を大きな希望を持って開くことができるよう、前を向いて進んで行きましょう。」とお話し下さいました。



今年も昨年につきコロナ禍中の復活祭でしたが、今年久しぶりの聖歌隊の歌声と共に信徒一同がそろってお祝いできたことを心から感謝いたします。ご復活おめでとうございます。





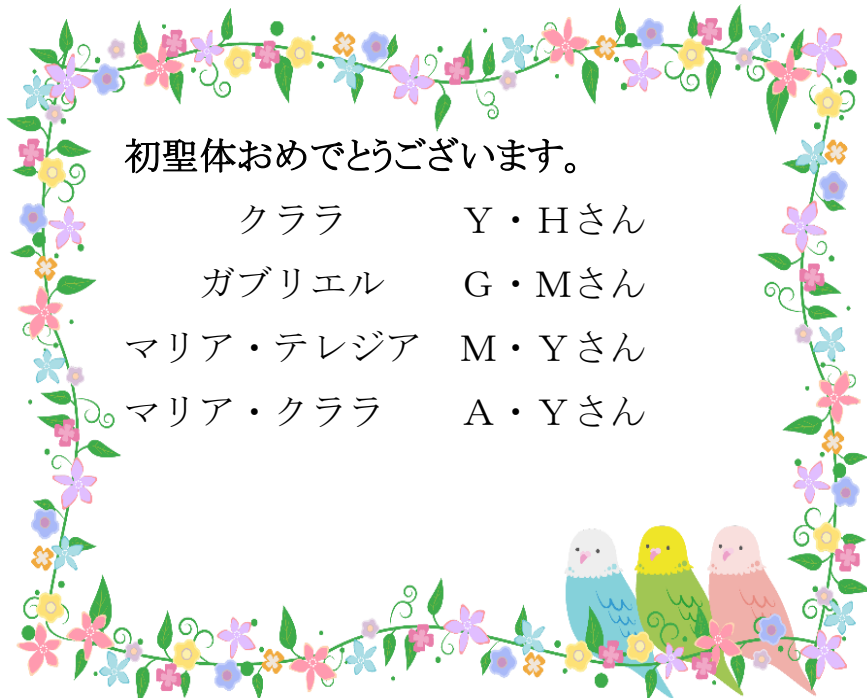
6月19日(日) キリストの聖体【初聖体】

ミサの中で4人のお子さん達が初聖体を授かりました。

緊張のなかにも、皆がはっきりと赤波江神父の問いかけに答える様子をご家族も誇らしくご覧になったことでしょう。可愛らしい答えに皆さんも思わず笑いがこぼれていました。

この子供達が教会の一員としてさらに成長していく姿を思いながら、主のお導きとお恵みを願い、お祈りしました。

「私たちが満たされたいのは胃袋ではなく心である。愛と喜びがあれば、わずかなものでも充分である。」
—赤波江神父、黙想のヒントより—




初聖体おめでとうございます。

- クララ Y・Hさん
- ガブリエル G・Mさん
- マリア・テレジア M・Yさん
- マリア・クララ A・Yさん




6月19日、はつせいたいのお恵みをいただきました。
はじめてご聖体をいただいたときは、自分の体の中にイエス Kristus が遊びに来てくれた気がしてふしぎで、ニコニコな気持ちになりました。
きんち、うしたけれど、お父さん、お母さん、弟、じいじはあは、神父さま、教会学校のリーダー、教会の人がおあいしてくれて、とてもうれしかったです。
これからたくさんの人となかよくして、おべんきょうもがんばりたいです。

クララ Y・H



初聖体をあげて
お勉強会でリーダーたちに、たく
さんネ申様やイエス様のことを教え
ていただいた初聖体の日、すごく
きんちょうでしたがネ申父様から
ご聖体をいただきましたとても
うれしかったです。 M・Y



はつせいたいに向けて、リーダーたちと
おべんぎょうをして、イエスさまが
やさしくて、こころのつよいかたにおお
ました。ごせいたいいただける日をたの
しみにしていたので、うれしかったです。
A・Y

G・M

ぼくははつせいたいを受けました。かみさまのいのちのりめいことを
しりました。もつともつといたいで、かみさまのいのちのりめいことを
とまました。ほんとうにうれしかったです。



7月31日に
マリア・マグダレナ
F・Kさん
が初聖体を受けられました。



7月3日（日） 七夕

主日のミサにそれぞれの願いが書かれたメッセージ付きの七夕飾りが祭壇に置かれました。

赤波江神父のご提案により、教会学校の子供たちが一生懸命に作った七夕飾り。楽しそうに制作する様子が目に浮かびました。短冊にこめられた私たちの願いが天に届きますように。



8月15日（月） 聖母の被昇天

19 時より赤波江神父の司式で聖母の被昇天ミサが行われました。

ミサのはじめに「8 月 15 日は聖母被昇天とともに、終戦記念日であり、日本ではお盆でもあります。全ての死者のために祈りましょう。」と赤波江神父が呼びかけられました。

平和旬間のメッセージが祭壇に奉納され、平和のため、家族、知人、亡くなった全ての方々のために祈りが捧げられました。

福音朗読は、マリアの賛歌「マニフィカト」として知られる「ルカによる福音」第 1 章.36 節から 56 節が読まれました。赤波江神父は「ロザリオの祈りの喜びの奥義2の箇所ではありますが、マリアもエリザベトも喜びの前には不安と苦悩に満ちた日々を過ごしていたことと思います。『主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう』というエリザベトの言葉のように、マリアは“神を信じる以外残された道はない”とある意味聖なる楽観主義で前に進んでいかれました。私達もそうありたいものです。」と話されました。



鳩の形のカードに信徒それぞれが平和へのメッセージを書きました



10月16日(日) セニョール・デ・ロス・ミラグロス

10月16日10時からの主日のミサで、ペルーの祝日セニョール・デ・ロス・ミラグロスをお祝いしました。

ラモス神父のスペイン語での説教のあと、赤波江神父は説教で「呼吸のリズムにあわせたロザリオなど単純な祈りの繰り返しは潜在意識の中にある神に呼びかけることです。それによって保たれた心の静寂から語りかけてくるのは神の声です。幸せとは単純な習慣からやってきます。皆さん幸せになってください。」と話されました。

10月2日に85歳で帰天されたオプス・デイ属人区司祭、フリオ富田末彦神父の写真も飾られ、祈りが捧げられました。富田神父は住吉のスペイン語ミサでもお世話になりました。永遠の安息をお祈りいたします。



秋晴れに、セニョール・デ・ロス・ミラグロスのおみこしが映えます

11月6日(日) 追悼祈念祭

主日のミサは追悼祈念祭が赤波江神父の司式で行われました。この一年に帰天なされた神父様方(Fr ペンケレシ、Fr 生藤、Fr 富田)、そして教会ゆかりの皆様方の在りし日をお偲びし、感謝と共に永遠の安息をお祈り申し上げました。

昨今は家族葬が多く連絡網もまわらないことがあり、お別れをご存じないことも多いので大切な追悼祭になりました。

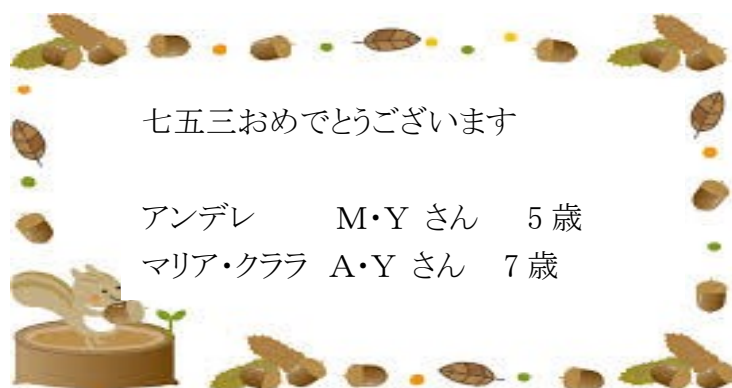
11月6日
年間第32主日
[追悼祈念祭]
司式
赤波江神父様



11月13日(日) 七五三のお祝い

主日のミサの中で二人のお子さんが、ジェロム神父より七五三の祝福を受けました。ジェロム神父は説教の中で「Don't be afraid. 『その時』がいつ起こるのかは大切なことではなく、神に向かっていく準備をすることが大切。神に向かっていく準備はもっと喜びをもって、心配せず恐れず進むことです。」と話されました。

また、七五三の祝福の中で神父は「この子供たちはお父さんお母さんだけの『喜び』ではなく、教会みんなの神様からいただいた大きな『恵み』であり、『喜びの源』です。どうぞこの子供達をお守りください。」と祈りました。



七五三おめでとうございます

アンデレ M・Y さん 5 歳

マリア・クララ A・Y さん 7 歳



～保護者の祈り～

すべての父である神様、この子供たちを授けてくださったことを心から感謝いたします。

この子供たちが、強く正しく生きるために 必要なお恵みをいつも与えてください。

また、親としての務めを、ふさわしく果たせるように光と力を与えてください。

主イエス・キリストによって、アーメン

《追悼 ペンケレシ神父》

エマニュエル・ポボン神父

ペンケレシ神父とわたしとは 55 歳離れています。しかし、初めて日本に来た時から兄弟と思いました。パリミッション会の集まりにペンケレシ神父が借りていたマンションへ行く度に兄弟として集まっていると感じました。彼が料理してくれたメニューはいつも同じでした。前菜だけが気候によって変わっていました。寒かったら温かい野菜のポタージュで、暑かったらサラダでした。メインはステーキとポテトでした。ステーキを焼くのが自信がなかったので、ステーキの担当者はグイノ神父でしたが、それ以外はペンケレシ神父が全部準備してくださいました。チーズは北海道のカマンベール、デザートはマックスバリューで買ったシュークリームかアイスクリームなどでした。コーヒーに必ず温めた牛乳を入れていました。わたしにとって素朴な料理と家庭的な雰囲気での田舎にいるように思えるほどでした。



印象に残ることは二つあります。一つ目は、ペンケレシ神父は毎日赤ワインを飲む習慣がありました。（ペンケレシ神父が入院された時、看護師に禁じられたにもかかわらず、ワインを一杯飲んでいました。それで 97 歳のペンケレシ神父様が 27 歳ぐらいの看護師に子どものように叱られているところをみたことがあります。）神父方の中でワインにうるさい人が多いですが、ペンケレシ神父はどんなワインでも満足していました。安いワインも高級ワインも同様に喜んでいました。

そして印象に残った二つ目は、この世に生きている間、常に神の国に向かっていました。色んなものに対して好奇心がありましたが、神の言葉と共にいつも生き、それ以外のものに深い興味がありませんでした。パソコンが得意でしたがそれも神様を伝えるための道具として使いました。神父だから神について話す格好を見せようとしませんでした。本当に日常生活の中に神の言葉と共に過ごしていました。この世の中で神が働いていること固く信じ、それに基づいて生きていました。頑固でありながら優しさを示しました。自分の考えにしか従いませんとはいえ、とても素直、委ねることもできました。

ドムスガラシアに入ってから亡くなる直前まで、いつも神の栄光を見ることについて話し、楽しみにしていました。わたしはその話を聞いてとても力づけられました。ペンケレシ神父は忠実、誠実な人でした。頑固なので一緒に働くのは難しかったかもしれませんが、信じる心に憧れます。神父でもありましたが、人の弱さの中で、揺るぎない神様への信頼を示しました。それも深く心に残っています。ペンケレシ神父の信仰は今でもわたしの信仰を養っています。その経験はペンケレシ神父

に出会えた数知れない人もしたと思います。ペンケレシ神父と一緒に歩んだ人の中に、その熱い信仰が燃えているのではないかと思います。

ペンケレシ神父は神様のしるしとして生きました。その兄弟に出会えて、その信仰を目撃することができて感謝します。それを継いで、自分の信仰の道を歩み続けることができると感じます。

最後にドムスに会いに行った時にペンケレシ神父がよく言っていた言葉で終わりたい：
「^{みくに}御国がきますように。」



2012 年米寿のお祝いの時

+	
パリ外国宣教会	
ペンケレシ ジャン マリー 神父	
1924年8月12日	フランスに生まれる
1948年10月3日	司祭叙階
1949年12月1日	来日
1952年～1953年	三田教会 助任
1953年～1956年	尼崎教会 主任
1956年～	JOC (働く若者のグループ) 阪神地連指導司祭
1960年～1962年	フランスへ一時帰国
1962年～1963年	福岡教区
1964年	大阪教区に戻る
1965年～1993年	鹿取・下山手・灘・須磨・北須磨・中山手
1993年	フランスにてサバティカル
1994年～	京都教区や修道院などで司牧
2002年	引退
2020年9月～	ドムスガラシアに居住
2022年1月7日	帰天 (98歳)

《ベネディクト ラブレ 生藤達男神父様 追悼の記》

S・Y

「神父様 お早うございます」「ああ～どうもご苦労さまです」
教会の掃除当番で訪れた私達を、少し古びて所々すりきれた黒いスータンの裾をひるがえしながら
出てこられた神父様は、満面の笑顔で出迎えて下さいました。
そしてあの未曾有の阪神淡路大震災に遭遇した日々にあっても、神父様の笑顔が消えることはありませんでした。

1925 年 4 月 16 日に兵庫県で生を受け、一般企業の社員を経て、1964 年 3 月に司祭に叙階されました。

住吉教会へは 1991 年着任し、その後 1995 年までの 4 年間主任司祭として司牧の任にあたられました。

その間 1995 年 1 月 17 日に発生したマグニチュード 7.3 の大地震は当時 70 歳の神父様にとっては、大変なご苦労の日々であったことと思います。

震災で全壊した司祭館の代わりに三木館二階の和室が生活の拠点となりました。階段を上がった左側が和室、右側に事務室と台所がありました。

ある朝、たまたま三木館の二階和室に行った私は、向かい側台所に足の踏み場もなく置かれた炊き出しの材料や食器や鍋、釜のありさまとは対照的に、きちんとたたまれたお布団が二組おかれた部屋の光景にびっくりしました。

当時まだ大学生だった谷澤宏明君が神父様のお手伝いをして起居を共にされていたので、お二人のお布団だったのです。

当時は婦人会やヨゼフ会も活躍し、婦人会の集まりは毎月一度金曜日に三木館の和室で行われていました。

1 月 14 日の金曜日にも和室に集まった私たちは神父様のお話を聞いてお祈りし、その後前年に行われたバザーの反省や小さな手仕事などをして、また来月とお別れした三日後の 17 日、死者 6000 人余を数える大震災が発生したのです。

その後の神父様は混乱の中でのミサや信徒の安否確認などに大活躍をされ、その後転任された八尾教会の主任司祭やガラシア病院のチャプレンとして働かれたのち、2010 年からは姫路市仁豊野にある「カトリック仁豊野ヴィラ」で静養されておられました。

住吉教会の広報誌「すみよし」は不思議なご縁で毎回神父様のお手元に届けられていました。勿論教会の広報チームからも届けられていたのですが、私が栃木県那須に住む友人に送っていた「すみよし」が、彼女の妹で仁豊野ヴィラに住むシスターに送られ、それを生藤神父様に渡して下さっていたようです。

神父様はいつも嬉しそうに、「ありがとう」と胸に抱きしめるようにしてお部屋に戻って行かれたと報告があり、住吉、那須、仁豊野と遠い旅をした「すみよし」が、つないでくれた神父様とのご縁に思いを馳せておりました。

神父様は 2022 年 7 月 11 日、97 歳で天に召されました。
長いご生涯を神のみ旨のままに歩まれた神父様が、いつも私たちを見守り、導いて下さるようにとお祈りいたします。

わたしが行ってみ前にいたり
み顔を上げる日はいつか
神よ、わたしはあなたを慕う

{詩編42より。生藤達男神父}



「甲山三年ぶりの聖五月」(前田大司教)
～帰天司教・司祭および納骨者のための祈念ミサ～

墓地委員 N・K

コロナ禍のため、一昨年、昨年と中止になった「帰天司教・司祭および納骨者のための祈念ミサ」が、5月25日(水)3年ぶりに甲山墓地で行われました。

当日は好天ながら蒸し暑い中、約100名の参加者があり、20名の司祭により行われました。住吉からも、遺族、広報チーム、墓地委員10数名が参加しました。



合同納骨式

ミサに先立って、住吉、玉造、香里など各教会からの合同納骨が、赤波江・

春名両神父司式により行われました。住吉からはH様(1名)、W様(3名)計4名の納骨がありました。

追悼ミサ

引き続き前田大司教、酒井補佐司教司式により追悼ミサが行われました。前田大司教は大阪教区に赴任後8年の間、多くの司祭との出会いと別れを、

「聖五月生きるも死ぬも神のもの」と詠まれました。

司祭納骨式

ミサの終わりに帰天された4人の司祭(神林 宏和、後藤 進、西山 俊彦、三竹 洋一)の納骨が行われました。

二人の神父様についての思い出を披露します。

神林神父様は、阪神・淡路大震災当時、教区事務局長で、住吉教会の復旧工事とその後の教会・幼稚園建設工事では大変お世話になりました。

教会・幼稚園建替えの際は、毎月建設委員会を開き、神父様も出席されましたが、ケンケンガクガクの議論で夜9時を過ぎることも度々ありました。後日、完成時にお礼に伺った際、神父様から「住吉に行くときは、胃が痛くなったヨ」と言われ、申し訳なく思ったことがありました。

後藤神父様は、私と同じ高校出身で、大学時代には「大阪カトリック学連」で一緒に活動したことが懐かしい思い出です。温厚な人柄で、住吉には黙想会の指導に来られたことがあります。

(当日の様様については、住吉教会ホームページの5月25日付ニュースに掲載されています。また、司祭納骨式については、大阪カトリック時報7月号に詳しい記事があります)

ここからは余談になります。

甲山の教区墓地の近くに、須賀敦子さんの墓があるのをご存じでしょうか。

須賀敦子さんは、翻訳家として、また、随筆家として没後も多くの愛読者をもっています。須賀さんをご存じない方のために略歴を記します。

須賀敦子さんは 1929 年（昭和 4 年）芦屋の裕福な家庭に生まれました。（のちに夙川に転居）小林の聖心小学校入学、その後東京に移り、聖心高等女学校入学 1948 年、新設の聖心女子大学に入学。卒業後はフランスを経て、イタリアに渡り、イタリア文学の研究に励みました。ミラノに住んでいた 1961 年、イタリア人と結婚（のちに夫とは死別）

日本に帰国後はイタリア、日本（谷崎潤一郎、川端康成など）相互の文学作品の翻訳紹介に努めました。慶應・上智・京大・東大などで講師としてイタリア語、文学を教え、後に上智大学教授となりました。一方随筆家としても活躍し、1991 年刊行の「ミラノ霧の風景」は講談社エッセイ賞、女流作家文芸賞を受賞しました。

1998 年（平成 10 年）心不全のため亡くなりましたが、24 年たった現在でも多くの読者に愛され、作家、評論家の高い評価を得ています。

私が須賀敦子さんの名を知り、関心を持ったのは、亡くなった深山光男さんの一言がきっかけでした。

ある日教会の図書室に深山さんが来られた時、居合せた私に、芦屋の出身で須賀敦子という有名な作家を知っているかと尋ねられたのです。

しばらくたって、NHK で須賀さんの生涯がドキュメントとして放送されました。小林と東京の聖心での須賀さんの折々の様子や、教え子の江國香織の追悼談話などがある貴重な映像でした。文学とは縁の遠い私ですが、本屋で須賀さんの本を購入しました。

須賀敦子さんについて、吉本ばななは追悼の辞で次のように述べています。

「豊かで、力強く、品があり、激しさを秘め、静かに深みをたたえている。

そういう美しい旋律のような文章を書くことができる稀な人でした」

教会の図書室にも、著作が何冊かありますので、興味ある方は手に取って見られては如何でしょうか。

以上



《各チーム活動報告》

宣教司牧チーム

2014 年の連絡網整備（この時からメール導入）から 8 年経ちました。天国に移られた方、施設に入られた方、他教会に行かれた方、反対に住吉教会に入られた方などずいぶん共同体メンバーも変化しました。今年、各地区司牧担当の者が名簿の整理をして、連絡方法のリストを作り、教会パソコンに保存しました。

みなさま、住所変更等ありましたらなるべく早く、事務室や各地区司牧委員までお届けください。

墓地委員会の方々は、毎年追悼祭の案内、お世話などやっつけてくださっています。司牧の仕事をしている者たちも高齢になり、次へ引き継いでいかなければと思っています。ご協力よろしく願いいたします。



R・K

典礼チーム『この1年を振り返り』

2022 年も長引くコロナ禍での一年となりましたが、これまでの感染拡大時のように中止されることなく、✦新年ミサ ✦新成人お祝いミサ ✦阪神淡路大震災ミサ ✦灰の水曜日 ✦受難の主日(枝の主日) ✦聖週間 ✦ご復活祭 ✦被昇天祭 ✦敬老お祝いミサ ✦セニョール・デ・ロス・ミラグロスミサ ✦追悼祈念ミサ ✦七五三お祝いミサなど、年間通して公開ミサを続けられました。

継続中の大阪教区の第 13 次の措置（全員で一緒に歌うことは避け、マスク着用し聖歌隊による歌唱や独唱は可能。）に従い、対策しながらも 6 月 19 日（日）キリストの聖体(初聖体 4 名)の日から聖歌隊のみ歌唱することと致しました。

また 11 月 27 日（日）待降節第 1 主日から【新しい式文のミサ】が実施されました。それに伴いミサ曲（ミサの賛歌 A・B・C）も新しくなり、ようやく楽譜も出来上がったので練習を始めています。今しばらく慣れるまで、お時間を頂戴いたします。

原則毎週火曜日午前に聖堂にて練習していますので、聖歌隊に興味がおありの方はお気軽にお越し下さい。また、ミサでの聖書朗読や先唱などのご奉仕を新たにお引き受け下さる方がおられましたら、お声がけ下さいますようお願い申し上げます。



A・K

財務チーム

クリスマスおめでとうございます。

財務チームのこの一年を振り返りますと、変わらぬメンバーと変わらぬ手順で献金の集計、出納記帳、諸事項の記録等の管理を行ってまいりました。この変わらぬ手順こそが大事で決算の財務諸表や次年度の予算立案の基礎となり、今後も大切な作業として守っていきたいと思います。住吉教会には数十年にわたる財務諸表や記録が保管されています。その一つひとつは住吉教会の歴史であり、またその時々を反映した大切な記録とも言えます。

今年は、コロナウイルス感染はオミクロン株の変異により依然として波がおさまりません。加えてロシアのウクライナ侵攻により人道危機、世界規模での経済秩序の混乱、ひいては私たちの実生活にも影響をおよぼしています。これを引き起こしている一部の権力者には、いち早く「平和であることの尊さに目覚めてほしい」と祈るばかりです。

財務チームはどのような環境であれ時流を見据えながら、これからも変わらぬ手順で作業を続けてまいります。



O・K

ホームページ委員会

コロナ禍などで教会へ来られない方にもお届けできるように、赤波江神父様の黙想のヒントを毎週土曜日に掲載しています。英語圏の方にも読んでいただけるように今年から日本語と英語で原稿をいただき英語ページにも同じ内容でのせています。聖書朗読については女子パウロ会のご厚意で主日の聖書朗読へのリンクをつけています。クリックしてあわせて読むことができます。また、年間予定表から聖書と典礼の表紙絵解説もオリエンズ宗教研究所のご厚意で読むことができます。住吉教会でのミサ説教、教話は8月28日分からトップページの司祭のメッセージの中、「説教、教話」で聞くことができます。

黙想のヒントの外、今年は11月時点で22件のニュース、11件のビデオを掲載しました。

ミサ等の予定変更はできるだけタイムリーに反映されるように、連絡があり次第日本語、英語、スペイン語の予定表を更新しています。

ホームページのセキュリティー強化のためにホームページのアドレスを変更しました。

新しいアドレスは、<https://cath-sumiyoshi.sakura.ne.jp> です。

皆さんの「お気に入り」、あるいは「ブックマーク」に登録して頂くと便利です。

Google 等で と検索していただいても新しいアドレスに到達します。



S・K

「営繕チーム」2022 年度 活動記録

教会建物・設備の管理・保全等の大きな仕事は「施設管理チーム」にお任せして、「営繕チーム」は主に教会設備、備品等の日常的な管理・営繕を行っています。

2022 年度の活動報告は下記の通りです。

1・聖堂、小聖堂、ホール、トイレ、廊下、階段等の清掃とお花の準備

* 「年間担当表」を作成し、そのとおり実施しました。皆様のご協力に感謝します

2・倉庫、備品の管理・保全・修理（電球、ゴミ袋、トイレトペーパー等）

- ① 聖堂建設から 16 年経過し、備品の劣化はやむをえません。あちこちの電球がしばしば切れ、その都度何回も取り替えました。（聖堂、香部屋、三木ホール、1 階、2 階廊下などの電球取り換え）
- ② 風除け室前のベンチの重い鉄枠が外れかけていたのを、幼稚園の先生からご指摘頂き移動撤去しました。
- ③ 8 月、司祭館の冷蔵庫が故障し使用不能の為エディオンに引き取り回収を依頼。
- ④ 倉庫内のスチール棚のネジ緩みの増し締め完了、花瓶等の転落防止の対処を検討中
- ⑤ 北駐車場の照明器具割れ修繕とランプ換え
- ⑥ ドア、扉のきしみ音など蝶板に潤滑油を塗布、三木ホールのドアの鍵の開閉が固く、困難となり潤滑スプレーの塗布など種々メンテを行っています。



3・植栽の剪定、花壇等の整備

- ① 営繕チーム独自では決定、実行できないこともあり、「シンボルツリーの伐採」は、評議会での方針決定により実施されました。

* 尚伐採後、跡地に「直径 1 cm、長さ 5 cm ほどの鉄筋棒が 1 本突出」していたのに気づき、電動グラインダーで切断しました。園児への危険を未然に防ぎ安堵しました。

- ② 27 年前の大震災の時崩壊したあの懐かしい旧司祭館前にあった大きな蘇鉄の「こぶ」から大事に育てた蘇鉄が立派に育ち、本年 4 月 10 日の「枝の主日」の「枝」が、住吉教会独自でまかなえたことは嬉しいことでした。
- ③ 教会周りの草抜きに人手を確保できず、火・土の卓球の日に営繕チームメンバーが毎回 1 時間ほど雑草抜きをし、東側と南側のフェンスの内側、駐車場横の花壇の中もきれいになっています。
- ④ ルルドの周りの植栽の剪定も年に何回か行っています。



4・「駐車許可証」の作成、更新、管理

駐車許可証の更新を行いました。新規や更新がまだの方は申請してください。

駐車や車の出し入れの際には、信徒や特に児童の安全には十分ご注意ください。

日曜日園庭に駐車され、最後に出られる方は必ず3個の門扉を閉めてからお帰りください。

5・聖堂の周辺や香部屋などの雨漏りに対する、評議会、施設管理チームの決定方針

(修繕、処置等の) への実施協力。*今後、雨漏りの原因となる機械室の水だまりの除去作

業等は営繕チームで実施します。

*今後の予定

1・溝部司教様お手植えの「玉之浦」椿の銘板を腐らないプレートへの切り替えを評議会で検討中。

2・ホールと会議室の「椅子の汚れ」をきれいにしたい。

*尚、作業の実施には皆様のご協力をお願い致します。

2022年10月22日



W、T、K



広報チーム



「すみよし」クリスマス号発行に向けてチーム一同いろいろな案を出し合い、年一回、皆様に楽しみにして頂けるようにがんばりました。

コロナ下ですが、これからもできるだけ多くの教会の行事やニュースをお伝えできるように励んで参ります。2022年「すみよし」クリスマス号、いかがでしたでしょうか？クリスマスおめでとうございます。

A・S

社会活動チームからのお知らせ

* 神戸中央教会にある社会活動センターへ、不足している毛布、寝袋、防寒着カイロ等のご寄付をお願いします。

*引き続き、シナピス大阪へのご支援をお願いします。難民移住移動者、及び困窮家庭へ消費期限が切れていない食料品、缶詰、お菓子等がありましたら、パウロ三木ホールに箱を置いてありますので、お入れ下さい。

*住吉教会は毎日第1土曜日が炊き出しの担当です。炊き出しに参加して頂ける方はパウロ三木ホールの掲示板にお名前をお書き下さい。



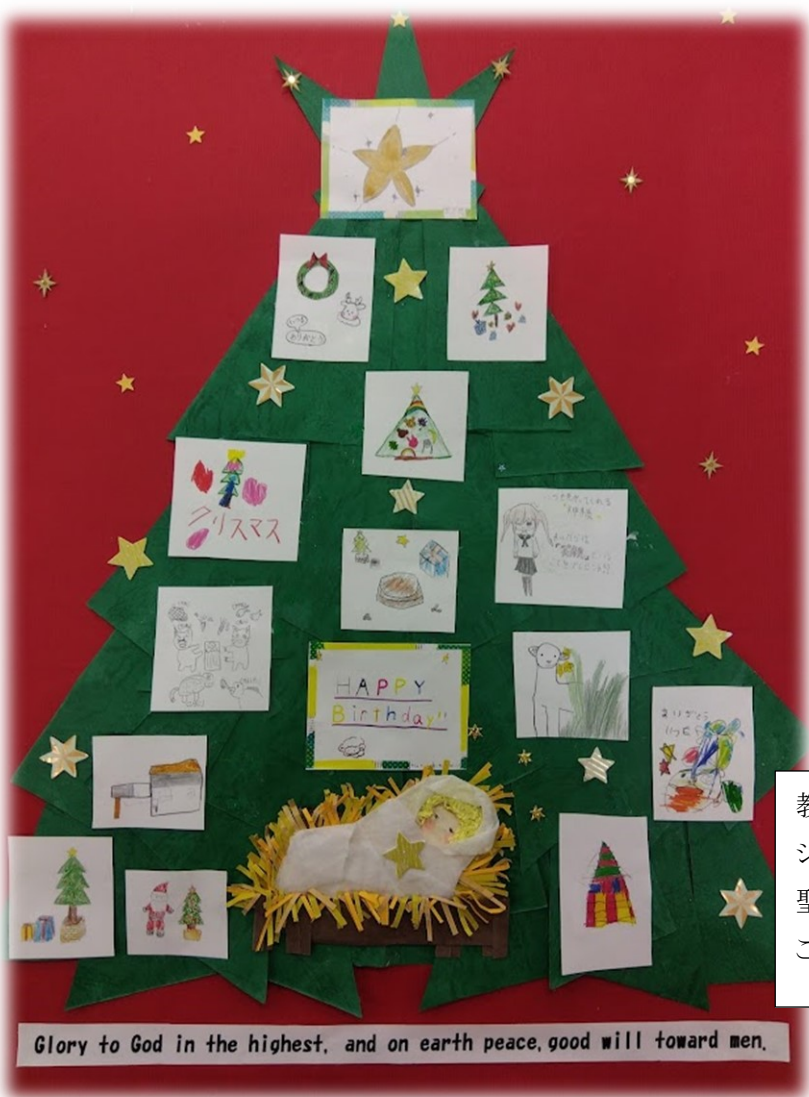
教会学校

：ロナが続く中ですが、子供たちに元気をもらいながら、細々と活動を続けてきました。ただ、リーダー不足も問題のひとつ。子供がお好きな方、ぜひお力をお貸しください。

M・U



教会学校卒業式。6 年間よく頑張りましたね。



教会学校の子供達のクリスマスにメッセージ。
聖堂入口に掲示していますので、
ご覧ください。

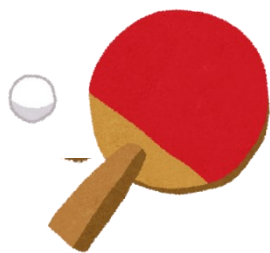
トピックス

《卓球を楽しむ会》

卓球を楽しむ会は評議会の承認を得て 2020 年 1 月から始まり、途中コロナで少しお休みはあったもののこの 10 月に 82 回目を迎えました。毎週火曜日と土曜日の午後 1 時～3 時に教会の第 2 会議室で開催しています。又毎月第 1、第 3 土曜日には教会学校の生徒さんやリーダーも参加し、最近では六甲教会のご婦人も加わりみんなでわいわいと楽しく遊んでいます。



ラケットなど用具は用意していますので、どなたでも年齢に関係なくぜひ一度お気軽にご参加下さい。待ってま～す。



《みその寄席》



幼稚園の（お母さんたちの）みその会主催、プロの落語家林家染太さんご出演の“みその寄席”が 9 月 21 日聖堂で開催されました。午前中は園児達、午後は信徒や近隣のお客様。急遽準備された高座はちょっとしたミニ繁盛亭。巧みな話術とご持参の小道具も活躍し、午前も午後も笑いに包まれ幸せな楽しい一時を過ごしました。

《図書紹介》

「キリスト教は進化論と共存できるか？」

フランシスコ・J・アヤラ著 藤井清久訳(教文館)

神が人間の幼子として生まれた。主の復活と共に、キリスト教信仰の根底をなす、この出来事に「人間とはいったい何者なのか？」という疑問が沸き起こる方も少なくないでしょう。

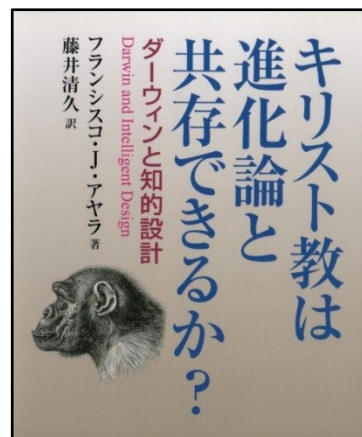
1996 年、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は「新たな知識により、進化論を単なる仮説以上のものとして認識するにいたった」と公式に述べました。この声明に対して、「人間とサルは大きく違う」、「それでは、信仰も進化の結果なのか?」、「進化論は、聖書の教えや天地創造等、信仰に対立する」など、世界中で論争が巻き起こりました。

本書では、「神の臨在を否定することなく、科学的知識は受け入れ可能であること」を詳しく解説します。また、「科学は信仰を支持することも拒絶することもできない」こと、一方、「聖書は天文学、地質学、生物学の権威ある教科書として解釈するべきではない」ことが指摘されており、非常に興味深い内容となっています。

著者は米国進化学会会長を務め、カトリック信徒であるカリフォルニア大学教授。ヒトゲノム・プロジェクト審議会顧問も務めたこの著名な遺伝学者が、進化論と信仰がなぜ共存できるのかを、説得力をもって解説します。最終章では、自然科学は非常に成功した形式であるが、人間が知識を獲得する唯一の方法ではなく、世界や宇宙について理解する他の有効な方法に、文学、芸術、共通感覚、哲学そして宗教があることが述べられています。

聖ヨハネ・パウロ二世が、「神のみが人間の魂を造ることができることを支持するならば、創造と進化は矛盾なく、両立する」ことを今一度考察する良い一冊です。

(編集部)



《 教会日誌 》

1 月	1 日	(土)	新年ミサ(神の母聖マリア・世界平和の日)
	9 日	(日)	新成人の祝福
	12 日	(水)	ペンケレシ神父葬儀ミサ(神戸中央教会にて)
	16 日	(日)	阪神淡路大震災27周年追悼
2 月	6 日	(日)	幼児洗礼
3 月	2 日	(水)	灰の水曜日
	6 日	(日)	四旬節黙想会
4 月	10 日	(日)	受難の主日(枝の主日)
	14 日	(木)	聖木曜日(主の晩餐)
	15 日	(金)	聖金曜日(主の受難)
	16 日	(土)	聖土曜日(復活徹夜祭)
	17 日	(日)	復活の主日
5 月	25 日	(水)	帰天司教・司祭および納骨者 追悼祈念ミサ・納骨式(甲山墓園)
6 月	5 日	(日)	聖霊降臨の祝日
	19 日	(日)	キリストの聖体 初聖体
8 月	6-15	日(土~月)	日本カトリック平和旬間
	15 日	(月)	聖母の被昇天
9 月	18 日	(日)	敬老のお祝い
10 月	16 日	(日)	セニョール・デ・ロス・ミラグロス
11 月	6 日	(日)	追悼祈念祭ミサ
	13 日	(日)	七五三の祝福
	27 日	(日)	典礼
12 月	18 日	(日)	待降節黙想会
	24 日	(土)	主の降誕 夜半のミサ
	25 日	(日)	主の降誕 日中のミサ



《編集後記》

「祭壇の 灯を増し聖夜 ミサはじむ」 (平岩 芳子)

今年も厳しい一年でしたが、主日のミサは欠かさず捧げられ、クリスマスを迎え「すみよし」を発行することが出来、感謝の一年でもありました。帰天なさったお懐かしい神父様方をはじめ信徒の方々と共に心をつないでクリスマスのお祝いを申し上げたいと思います。

「息を矯め 聖誕祭の 燭吹き消す」 (山口 誓子)

M・H

振る舞うそれぞれに 落日のかげ否(いな)めず 残照か薄暮か 鐘の音鳴り渡る
遙か地平に彷徨(さまよ)う姿 悟りより迷いを 背負う道の果て

命の幽(かそ)けさを欲望の影認めず 誘(いざな)いか あがきか
晩鐘の鳴りやまず 未だ教えを説く期熟さず 悟りとは無縁の未熟を楽しむ
遙か地平に彷徨う姿 悟りより迷いを背負う道の果て 「未熟の晩鐘」小椋佳

先日友人が故郷の檀家寺で昨年亡くなられたお母さんの法事を。皆様が揃われるまでの間にとお坊さんがこの CD をかけて下さったとか。YouTube で聴き心がふるえました。この 3 年、あまりにも今までと異なる日々を過ごしています。が・・・黙想のヒントを読ませていただき、毎日曜日に皆様と会え、「あ～私には教会がある」と。未だ悟りとは無縁の未熟な日々であってもどれほどありがたさを戴いている事か・・・感謝

K・T

「すみよし」第211号

発行日	2022年12月24日
発行責任者	赤波江神父 コンサルタ神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町 2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380
https://cath-sumiyoshi.sakura.ne.jp/	





【ミサ】

日曜日 09:30

月・火・水・木・土曜日 07:00

(第 2・4 月曜・火曜は朝のミサはありません)

金曜日 09:30

第 1・第 3 土曜日 (スペイン語) 19:00

最終日曜日(不定期) (ドイツ語) 14:00



ミサの時間の変更等がありますので
HP の「今月の行事予定」でご確認ください。

【講座】 金曜日 10:00 聖書研究会

【教会学校】 第 1・3 土曜日 対象:小学校 1 年生～6 年生

上記、信仰講座・教会学校は 新型コロナウイルス感染状況に

応じて開催・中止を判断しております。お問い合わせください。

【社会活動】 野宿者支援の炊出し・神戸入港の外国船乗組員支援ほか

* ミサ・講座とも時間、曜日に変更がある場合があります

詳細はカトリック住吉教会ホームページをご覧ください。

<https://cath-sumiyoshi.sakura.ne.jp>

TEL 078-851-2756 FAX 078-842-3380



～あなたにとってクリスマスとは？～ WHAT DOES CHRISTMAS MEAN TO YOU?

